

未来の地下戦車長

海野十三

青空文庫

かわった手習てならい

岡部おかべ一郎という少年があつた。

彼は、今年十六歳であつた。

彼の家は、あまりゆたかな生活をしていなかった。それで彼は、或ある電灯会社につとめて、もっぱら電灯などの故障の修理を、仕事としてゐる。なかなか一生けんめいに働く一郎であつた。

彼は、中学校へもあがれなかつたが、技術は大好きであつた。

そのうち、電気工事人の試験をうけて、一人前の電気工になろう

と思ひ会社の係長さんに、いつも勉強をみてもらっている。

ところが、その一郎が、近頃、なにに感じたものか、毎朝起きると机に向つて墨すみをする。

墨すみがすれると、こんどは、古い新聞紙を机の上ののべて、筆に、たつぷり墨の汁しるをふくませる。それから、筆を右手にもつて、肘ひじをうんと張り、新聞紙の面にぶつつける。

“未来の地下戦車長、岡部一郎”

これだけで十二文字になる。

この十二文字を、彼は、古新聞の両面が、まっくろになるまで、てなら手習いをするのである。

一昨日さくじつも、やった。昨日もやった。今日もやった。だから、

明日も、やるであろう。

書く文字は、いつも同じである。

“未来の地下戦車長、岡部一郎”

毎朝、この文字を三十二へんぐらいも、習うのである。

字が上手になるためのお習字かと思うと、そうばかりではない。

いや、はつきりと一郎の気持をいうと、字のうまくなることは、

第一の目的ではなく、第二以下の目的だ。第一の目的は、なにかというのに、それはもちろん、本当に、未来において地下戦車長になることだった。

地下戦車長！

地下戦車——なんて、そんなものが有るのであろうか。

地下戦車とは、地面の下をもぐって走る戦車のことである。そんな戦車がある話を、だれも、きいたことがない。だが、一郎は、いうのである。

「そうでしょう。どこにもない戦車でしよう。だから僕は、地下戦車を作って、その戦車長になりたいんだ。ああ、地下戦車！

そんなものがあれば、どんなにいいだろう。日本の国防力が、うんと強くなるにちがいない。だから僕は、きつと作りあげるのだ。地下戦車を！」

岡部一郎は、そんな風に、いうのであった。

それは、正しくまさ一郎のいうとおりであった。地下戦車とは、じつにすばらしい思いつきである。地下戦車が出来たら、そいつは、

どんどん、地面の下を掘って行って、敵陣の真下に出るのである。そして、爆薬をそこに仕掛けるとか、或いは、めりめりと、敵の要塞ようさいのかべを破つて、侵入する。さぞや敵は、胆きもをつぶすことであろう。たしかに、そいつは強力な兵器である。

一郎の思いつきは、じつに、すばらしいのであるが、はたして、そんなものが出来るであろうか。こいつは、なかなかむつかしい問題である。

「そんなもの、出来やしないよ。だって、水の中や空気の中じゃないんだもの。地面を掘ってみても、すぐわかるけれど、土というものは、案外かたいものだよ」

と、一郎の仲良しの松木亮二まつきりやうじが、いったことである。

「そんなに、かんたんには、出来やしないよ。しかし、工夫すれば、きつと出来ると思うんだ。それに、地下戦車が日本にあれば、すてきじゃないか。どこの国にだって、負けないよ。僕は、なんとかして、地下戦車を作るんだ」

「だめだよ。そんなむずかしいものは……」

「いや、作るよ。作ってみせる。きつと作って、亮二君を、びつくりさせるよ。いいかい」

「だめだめ。出来やしないよ。そんな夢みたいなこと」

亮二は、一郎のいうことを、とりあわなかつた。

いや、亮二でなくとも、大人でも、一郎のいうことを、とりあわなかつたであろう。

「日本のため、僕は、どんなことがあっても、地下戦車を作つてみせるぞ」

電灯会社の修理工の一郎は、だんぜん地下戦車を作りあげつもりである。さればこそ、毎朝、
“未来の地下戦車長、岡部一郎”
と、大きな文字を書いて、自分をはげましているのであつた。

はたして、地下戦車は、一郎の手によつて、出来上るだろうか。今のところ、少年修理工岡部一郎と地下戦車との間には、あまりに大きなへだたりがあるように見える。

痛い瘤こぶ

一郎は、それから後も、ずっと、『未来の地下戦車長』の手習てならいをつづけていた。

或日、彼は、会社の机に向つて、そこに有り合わせた修理引ひきり受書用紙けしよを裏がえしにして、ペンで『未来の地下戦車長』と、また書き始めたのであった。

「おや、岡部。お前、なかなか字がうまいじゃないか」とつぜん、うしろで、係長の小田おださんの声がした。

「いやだなあ、ひやかしちや……」

と、一郎は、きまりが悪くなつて、顔をあかくした。

「なんだい、この『未来の地下戦車長』というのは……」

小田係長は、にこにこ笑いながら、うしろから一郎のあたまをおさえた。

「うわツ。いたい」

と、一郎は、係長さんの手を払^{はら}って、その場にとび上った。

「あれツ。どうした。どこがいたい」

「係長さん、ひどいや。僕の頭に、いたい瘤^{こぶ}があるのに、それを上から、ぎゅツとおすんだもの」

「ははあ、瘤か。そんなところに瘤があるとは知らなかった。地下戦車長岡部一郎大將は、はやもう地下をもぐって、そして、そんなでかい瘤を、こしらえてしまったのかね」

係長さんは、うまいことをいった。

一郎は、こまっってしまった。

そこで彼は、未来において地下戦車長を志す^{こころざし}わけを、係長に話をした。

「そうかい、これはおどろいた。君は、本気で、地下戦車をつくりななんだね」

「そうですとも」

「それで、なにか、やってみたのかね」

「え、やってみたとは……」

「なにか、模型でも、つくってみたのかね。それとも、本当に、穴を掘って、地下へもぐってみたのかね。頭に瘤をこしらえてい

るところを見ると、さては、昨日あたり、もぐらもちの真似をやったことがあるね」

係長さんは、しきりに、一郎の頭の瘤を、いい方へ考えてくれる。

しかし、この瘤は、そんなことで出来たのではなかった。尤ももつとこの瘤は、昨日出来たことだけは、係長さんのことばどおりであったけれど。この瘤は、じつをいえば、昨日、停電した家へ、一郎がいつて、ヒューズの取換とりかえをやったが、そのとき、うっかりして、鴨居かめいへ、頭を、いやというほどぶつけたため、出来た瘤であった。決して、名誉な瘤ではなかったのである。

「係長さん。僕は今のところ、こうやって、毎日手習いをしてい

るのです。そして、神様に祈っているのです」

「なんだ、たった、それだけかい」

「ええ、今のところ、それだけです」

「それじゃ、しようがないねえ」

係長さんは、はきだすようにいった。

「手習いしていちや、いけないのですか」

「いや、手習いは、わるくはないさ。しかし、われわれ技術者たるものはダネ、何か考えついたことがあつたら、すぐ実物じつぶつをつ

くつてみる必要があるだ。技術者は、すぐ技術を物にしてみせる。

そこが技術者の技術者たるところでもあり、誇りでもある。――

いや、むつかしい演説になっちまったなあ。くだいていえば、早

く実物をつくりなさいということだ。考えているだけで、実物に手を出さないのでは、技術者じゃないよ。実物に手をだせば、机のうえでは気のつかかなかつた改良すべき点が見つかりもするのだ。おい、未来の地下戦車長どの。こいつは一つ、しつかり考え直して、出直すんだな。私は、たのしみに行っているよ」

そういつて、係長さんは、一郎の頭に手をやろうとした。

「おっと、おっと——」

一郎は、あわてて、体をかわした。

「あははは。これは、うっかりしていた。あははは」

「あははは」

一郎も笑った。全く、やっかい厄介なところへ瘤が出来たものである。

そのとき、向うから、一郎を呼ぶ声があった。

「おい、岡部。とおり通のそば屋さんから、電話があつたんだ」

「おそばなんか、だれもちゅうもん注文しませんよ」

「注文じゃないよ。コンセントのところから火が出て、停電しちゃったとき。早く来て、直してくれというんだ。ぐずぐずしていると、だいやうしょく代用食を作るのがおそくなって、会社へも、おそばをもつていけないから、早く来て、直してくれだとき。だから、お前、すぐ行ってくれ」

「へえ、ばかに、長いことばを使って、修理請求をしてきたものだね」

「それは、そのはずだよ」

「えっ」

「あたまが悪いなあ。電話をかけてきたのは、おそば屋さんだもの。おそばは、長いや。あははは」

「なあんだ。ふふふ」

仕事をしていた係の人々も、一度にふきだした。

「これこれ、笑い話は、後にして、岡部、自転車にのつて、直ぐ、おそば屋へいつて来なさい。一分おくらせれば、それだけ、国家の損失なんだから……」

係長さんも、にやにや笑いながら、一発痛いところを、一郎たちにくらわせた。

戦車博物館

その日の夕方、一郎は、家へ帰った。

弟や妹が、総出で、お膳の仕度をしていた。やがて、母親が、お勝手から、大きな井どんぶりにもりあげたおかずをもって、お膳ぜんのところへ来た。それから、まるで戦場のように急いぞがしくて賑にぎやかな食事が、いつものように始まった。

一郎たちの父親は、一昨年、病気で亡なくなつた。だから、さびしい母親を、一郎をはじめ、四人の子供たちが、なぐさめ合い、

元氣をつけているのであった。

食事が終わると、子供たちは、母親のお手伝いをして、
跡あと片かた付づけだ。みんなが働くから、どんどん片付いていく。

その後は、みんなラジオの前に、あつまってくる。

だが、一郎は、その夜にかぎって、ラジオの前に出て来なかった。彼は、玄関においてある自分の机の前に坐りこんで、前に一枚の紙をのべて、しきりに首をひねっている。

紙の上は、まだ、まっ白だった。

「ええと、地下戦車というやつは、どんなところをねらって、こしらえればいいかなあ」

彼は、ひとりごとをいった。それで分った。彼は、いよいよ地

下戦車の設計にとりかかったのである。察するところ、昼間、係長の小田氏からいわれたこと——「神に祈るのもいいが、ただ祈るだけじゃ、だめだ。また、考えているだけじゃ、だめだ。技術者という者は、考えたことを、早く実物につくりあげて、腕をみがき、改良すべき点を発見して、更にさらいい実物をつくり上げるよ、心がけねばならぬ」——ということばが、深く一郎の心に、きざみつけられたものと見える。そこで、いよいよ実物設計にとりかかったわけである。

「どうも、見当がつかないなあ。どこを、ねらえばいいのかなあ」
一郎は、すこし苦戦のていであつた。

「とにかく、地面の下を、戦車が掘りながら、前進しなければな

らないんだから、つまりソノー……」

つまりソノーで、困ってしまった。

一郎は、気をかえて、本箱の間をさがしはじめた。

やがて彼は、一冊の切抜帳を引張り出して、これを机の上に、ひろげた。この切抜帳には、ものものしい題名がついている。曰いわく「岡部一郎戦車博物館第一号館」と！

岡部一郎戦車博物館第一号館！

いや、これは、他の人が読んだら、ふき出して笑うだろう。

しかし一郎は大真面目であった。

各頁ページには、新聞や雑誌から切り抜いた世界各国の戦車の写真が、ぺたぺたと、はりつけてある。そしてその下には、その戦車の性

能が一々くわしく記入されている。

（この戦車が、みんな実物だったら、大したもんだがなあ）

一郎は、切抜帳をひろげるたびに、そう思うのであった。

なにも実物であるには及ばない。たしかにこの切抜帳は、りっぱな戦車博物館である。第一号館は、もう頁が残り僅かわずであった。

（やあ、もう陳列場所が、いくらもあいていないぞ。近いうち、第二号館の建築に、とりかからなくては……）

一郎は、なかなか忙しい身の上だ。

さて、「第一号館」を、いくども、ひっくりかえしてみたが、そこにある戦車は、いずれも地上を駆かける戦車ばかりであった。こいつを、このまま、地下へはこび入れても、さっぱり前進させ

ることができないことは、明白であつた。

「はて、これだけ、りっぱな戦車がたくさんあつても、参考になるものは一つもないぞ」

一郎は失望を禁ずることができなかつた。

全く、いやになつてしまつた。彼は、ごろんと、うしろにたおれて、ぼんやり考えこんでいたが、そのうち、ふと、誰かのいつたことばを思い出した。

「欧米など、外国の工業に依存していたのでは、日本にりっぱな工業が起るわけがない。はじめは苦しいし困るかもしれないけれど、日本は日本で一本立ちのできる独得の工業をつくりあげることがある。それは一日も早く、とりかからなくてはならないこと

だ！
”

一郎は、むつくり起き上った。

「そうだ。真似をすることなら、猿まわしのお猿だって、うまくする。よし、自分で考えよう！」

「なにを、ひとりごとをいつているの、兄ちゃん」

後で一番とし下の弟の二郎の声でした。

「二郎、だまっておいでよ」

「いやだ。兄ちゃん、いくよ。お面めん！」

ほかりと、一郎の頭に、新聞紙をまいてつくった代用品の竹刀しなが、ふりおろされた。

「ああッ、いたい！」

一郎は、とび上った。なんとまあ、災難さいなんな頭の瘤うぶだろう。ち
ようど、頭あたまのてっぺんにある。弟あにまでに、その痛いところを殴なぐ
つけられて……。

だが、一郎は、逃げ足の早い弟を、追おうともしなかった。じ
つにそのとき、彼は、神様のお声をきいたように思ったのである。
「そうだ。係長さんが、〃おい岡部、その瘤は、もぐらもちの真
似まねをして、こしらえた瘤うぶなんだろう」といった。そうだそうだ。
僕は、なにをおいても、自分が地下戦車ちかせんになつたつもりで、まず
自分で穴あなを掘ほつてみよう。それがいい」

彼は、えらいことを悟さとつた！

人間地下戦車

次の日から、一郎の生活が一変した。

彼は、朝早く起きると、例の手習いをすませ、その後で、この寒いのに、シャツとパンツとだけになって、庭におりた。

「さあ、僕は地下戦車だぞ。どこから、もぐるかなあ」

彼の手には、シャベルが握られていた。

「さあ地下戦車前進！」

彼は自分で、自分に号令をかけた。そして、えっさえっさと懸か

け声こゑをして、シヤベルで、庭の土を掘りだした。

弟の二郎が、その声をききつけて、とんできた。

「兄ちゃん。そこを掘ってどうするの。畑をこしらえて、お芋いもを植えるの」

「ちがうよ」

「じゃあ、ううツ、西瓜すいかを植えるの。玉蜀黍とうもろこし植えるの」

二郎は、自分の大好きなものばかりを、かぞえあげる。

「ちがうよ、ちがうよ」

「じゃ、なにを植えるの。僕に教えてくれてもいいじゃないか。

あ、分った。南京豆なんきんまめだい。そうだよ、南京豆だい」

「ちがうちがうちがう。ああ、くるしい」

一郎はふうふういって、泥だらけの手の甲で額を横なぐりに拭いた。

「あ、兄ちゃんが顔を泥だらけにした。お母ちゃんに、いいつけてこようツと」

二郎は、ぱたぱたと縁側えんがわをはしつていった。一郎は、自分の掘った穴をみている。こんなにふうふういって、穴を掘ったのに、その穴は、やっと自分の頭が、入るくらいの大さきに過ぎなかった。

「この人間戦車は、性能が悪いなあ」一郎は、嘆息たんそくした。

しかし、こんなことで、へたばつては、未来の地下戦車長もなにも、あったものではない。そう思った一郎は、再びシャベルを

握ると、さらに大きな懸け声を出して、えっさえっささと、穴を掘っていった。

ばたばたと、縁側えんがわに、足音がした。

「まあ、一郎！」母親の、呆あきれたらしい声だった。

「ほらね、お母ちゃん。兄にいちゃんの顔、あんなに、泥んこだよ」
「一郎、朝っぱらから、なにをしているのです」

「僕は今、……」いおうと思ったが、一郎は、そこで、あやうくことばを呑んだ。

（ああ、もうすこしで喋しゃべるところだった。語るな、軍機ぐんきだ！ た
とえ、母親にだつて）

「ちよつと、いえないの。国防上、秘密のことをやってやるんで

すからねえ」

「え、国防上秘密のこと？」

母親は、聞きかえしていたが、やがて二郎の頭をなでて、

「二郎や。兄ちゃんは、防空壕ぼうくうごうを掘っているのだよ。出来たら、お前も入れてお貰もらい」

そういつて、母親は安心して、奥に引込んでしまった。

（防空壕？ ははあ、これが防空壕に見えるかなあ）

防空壕をつくるにしても、一人では、たいへんである。シャベルをもつ一郎の両腕は、今にも抜けそうになってきた。しかし彼は頑張って、土と闘った。

それでも二十分程かかって、やっと腰から下が入る位の穴が掘

れた。

彼は、疲れてしまつて、自分の掘つた穴に、腰をかけた。シャベルの先をみると、土とはげしく磨^すり合^あつたために、鋼鉄が磨かれて、うつくしい銀色に、ぴかぴか光っていた。

鉄と土との戦闘である——と、彼は、また一つ悟^{さと}つたのであつた。

それから彼は、また頑張つて、庭を掘りつづけた。ようやく、自分の体が入るだけの穴が出来たとき、また母親が顔を出した。

「一郎。もう三十分前だよ。会社へ出かけないと、遅くなりますよ」

「はい。もう、よします」

人間地下戦車は、土を払って、立ち上った。

さて、この調子では、いつになったら、本当の地下戦車が出来ることやら……。

だが、この一見ばかりらしい土掘り作業こそ、後の輝かしい岡部地下戦車兵団出現の、そもそも第一頁^{ページ}であったのである。だが、今ここでは岡部将軍も只の一少年工に過ぎなかった。

らんまる
蘭丸と数値^{すうち}

「係長さん、僕は、けさ、人間地下戦車になって、活動を開始しましたよ」

岡部一郎は、会社へいつてからお昼の休みの時間に彼をかわいがってくれる係長の小田さんに此この報告をした。

「なんだって。その人間なんとかいうのは、なんだね」

係長さんは、鼻の下の小さい髭ひげをこすりながら、一郎の顔を見
た。

「人間地下戦車ですよ」

「人間地下戦車？　なんだい、それは……」

係長さんは、目をぱちぱちして、鼻の下をやけにこすった。この係長さんは、わからないことがあると目をぱちぱち、鼻の下を

やけにこするくせがある。そうやると、頭がよくなって、理解力がでてくるらしい。

そこで一郎は、けさ、うちの庭で、シャベルをもって、土を掘ったことや、母や弟から、防空壕をつくっているのだと思われたことを話した。

「……人間地下戦車は、だめですね。ほんのぽちりしか、穴が掘れないのですもの……」

と、一郎が残念そうにいうと、係長さんは「ふーん、それはまあ、そうだろうな」とうなずき、

「だが、岡部。ほんのぽちりしか掘れなくても、もしもこれを毎日つづけて一年三百六十五日つづけたとしたら、どうだろう。」

計算してみたまえ」

「計算？　計算するのですか」

「そうだ。技術者というものは、すぐ計算をやってみなければいけない。多分このくらいだろうと、かんだけで見当をつけるのはよくないことだよ。技術者は、必ず数値のうえに立たなくちゃ」

係長さんが、むつかしいことをいいだしたので、一郎少年は、わけがわからなくなった。

「数値のうえに立つとかいうのは、なんのことですか。石段の上でも、のぼるのですか」

「冗談じゃないよ。数値の上に立つというのが、わからないかね。

岡部は森蘭丸もりらんまるという人を知っているかね」

「森蘭丸？ 森蘭丸というのは、織田信長の家来けらいでしょう。そして、

明智光秀が本能寺に夜討ようちをかけたとき、槍をもつて奮戦し、

そして、信長と一緒に討死うちじにした小姓こしょうかなんかのことでしょう」

「そうだ、よく知っているね。どこで、そんなことおぼえたのかね。ははあ分った。浪花節なにわぶしをきいて、おぼえたね」

「ちがいますよ。子供の絵本でみたんですよ」

「子供の絵本か。僕は浪花節で、おぼえたのだよ。あははは。――

まあ、そんなことは、どうでもよい。その森蘭丸が、なかなか数値の上に立つ行いおこながあつたことを知っているか」

「知りませんねえ」

「じゃあ、話をしてやろう。信長が、或る日、小姓を集めていう

には、お前たちの中で、もしも余の佩はいているこの脇差わきざしのつかに、幾本の紐ひもが巻いてあるか、その本数をあてたものには、褒美ほうびとして、この脇差をつかわそう。さあ、誰でも早く申してみい。

『はい』と答えて力丸りきまるウ……」

「係長さん、へんなこえを出さないでくださいよ。今、所長さんが、戸口から、じろつとこつちを睨にらんで通りましたよ」

「なあにかまやしないよ。別に悪いことをやっているんじゃない。これで三味線しやみせんがはいると、わしや、なかなか浪花節をうまく語るんだがなあ」

「係長さん、どうぞ、その先をいってください」

「うむ、よしきた。『二十五本でございます』と、力丸りきまるはいっ

た。『あはは、ちがうちがう、お前は落第だ。さあ、他の者！』
こんどは坊丸ぼうまるが、『お殿さま、四十二本でござります』『ああ
そんな不吉の数じゃない。駄目駄目、さあ、お次』と、だんだん
小姓たちに答えさせてみるが、一人として、これを当てるものが
ない。すると、残ったのが、森蘭丸、只一人じゃ。『蘭丸、お前
はさつきから、黙っているが、あとはお前一人じゃ、早くこの脇
差のつかをまいてある紐の本数をこたえろ』と信長の御催促ごさいそくが
あった。そのとき森蘭丸は、へへツと頭を下げ、『わたくしは、
その答をつかまつ仕りません』という。信長、声をあららげ、『答えぬと
は、無礼者。なぜに答えぬ。そちはこの脇差が欲しゆうないか』
蘭丸つづいて平身へいしん低頭ていとういたし『おそれながら、申上げます。

御脇差は、欲しゆうござれど、私はお答えいたしませぬ』『なぜ
じや、わけをいえ』『はい私は、その紐の本数を、存じ居ります。
実を申せば、お殿さま、厠かわやに入らせられましたとき、私はお出を
待つ間に、紐の本数を数え置きました。されば、私は存じ居るが
ゆえに、お答えすることをば憚はばかります』蘭丸は、仔細しさいを物語つて、
平伏へいふくした。——どうだ、聞いているかね」

旅順戦りよじゆんせんの坑道こうどう

「ええ、聞いております。なかなか面白い浪花節なにわぶしてきのお話ですね」

「これからがいいところだ。よく聞いていなさい。——そこで信長公は、蘭丸の正直を非常にほめて、脇差を下し置かれた。実は信長公は、先ごろかわや厠すきまに入っていて、蘭丸が脇差の紐の本数を数えているのを隙間から御覧になっていたのだ、そこで、わざとこういう質問を発して蘭丸の正直さをたしかめてごらんになったという話さ。どうだ、感心したか」

「感心しましたが、数値の上に立つというのは……」

「そこだよ。信長公は蘭丸が正直なのを褒ほめて、脇差を下し置かれたと、浪花節ではいつているが、それは嘘だと思う」

「嘘ですか。では……」

「僕は、嘘じゃないかと思う。信長公は、こういつて褒められた。『蘭丸、お前は数値の観念があつて、感心な奴じゃ。何でも、物の数は、数えておぼえておけば、必ず役に立つ。大きくなつて、軍勢を戦場に出してかけひきをするについても、まず必要なのは、作戦は常に数の上に立つていることじゃ。数を心得ないで、がんばかりで物事を決めるような非科学的なでたらめな奴は、頼母たのもしくない』と、信長公は蘭丸を褒められたのが真相じゃろうと、僕はそう思うんだ」

「なあんだ。係長さんが、そう思うのですか」

「いや、本当は、きつとそうだろうと思うのだ。信長公は、科学的なえらい大将だったからね。つまり、数というものを土台にし

て、物事を考えるという事が、たいへん大事なことなのさ」

「いや、面白いお話を、ありがとうございました」

と、一郎は、おじぎをして、向うへ行こうとした。

すると係長さんは、大声で、それを止め、

「おいおい、岡部。お前は話の途中で向うへいって、いけないじゃないか」

「はあ、まだ話のつづきがあるのですか」

「続があるのですかじゃないよ。ほら、あのことはどうした、君の家の防空壕のことは……いや防空壕じゃない、人間地下戦車のことは……」

「ああ、そうでしたね。こいつは、しまった。係長さんのお話が、

あまりに面白かったもので、話の本筋を忘れてしまったんです」
「つまり、いいかね、一日で掘った壕の長さを三百六十五倍すると、一年間に、どのくらいの壕が掘れるかという答えが出てくるだろう。さあ、計算してみたまえ」

係長さんは、ちゃんと、話の本筋をおぼえていた。

「さあ、けさ、掘ってきたのは、ほんのわずかです」

「わずかでもいい。これを三百六十五倍するのだ」

「ええと、まだ穴になっていないのですけれど、あの調子で毎朝掘るとして、三日に、一メートル半位ですかね」

「じゃあ、一日につき半メートルだね。その三百六十五倍は？」

「半メートルの三百六十五倍ですから、百八十二メートル半です」

ね」

「そら、見たまえ、百八十二メートルもの穴といえば、相当長い穴じゃないか」

「そうですね。ちよつと長いですね」

「朝だけ、掘つても、一年には約二百メートルの穴が出来る。これを十人が掘れば、二千メートル。また二百メートルの穴でよいのなら、十人あれば、三十六七日で掘れる。明治三十七八年戦せんえ役きのとき、旅りよじゆん順いくさの戦いくさにおいて、敵の砲台を爆破するため、こうした坑道こうどうを掘つたことがあるそうだ」

「はあ、人間地下戦車は、そんな昔に、あつたのですか」

「うむ。いくら、わが軍が、肉弾でもって、わーつと突撃してい

つても、敵のうち出す機関銃で、すっかりやられてしまつて、敵の陣地も砲台も一向に抜けないのだ。仕方がないから、敵の陣地や砲台の下まで坑道を掘つた。そして、ちようどこの真下に、爆薬を仕かけてきて、導火線を長く引張り、そしてどかーんと爆発させたのだ。こいつが、なかなか効^きき目^めがあつて、それからというものは敵の陣地や砲台が、どんどん落ちるようになった。わが工兵隊のお手柄だ」

「はあ、なるほど。昔の兵隊さんは、えらいことをやつたものですね」

「あまり効き目があるものだから、敵の方でも、この戦法を利用して、わが軍の方へ穴を掘つてきた。とんかちとんかちと、穴の

中でつるはしをふるって土を掘っているのが、お互いに聞えることさえあつた。早く気がついた方が、爆薬をしかけて、後方へ下がる、知らない方は土を掘りながら、爆死したものだ」

「ずいぶん、すごい話ですね。係長さん、これもやつぱり、浪花節でおぼえたのですか」

「ばかをいえ。そういつも浪花節ばかり聞いていたわけじゃない。これは、その戦争に出た、僕のお父さんとうから聞いた話だ」

井戸掘り地質学

係長さんから、数値の上に立った模範少年の森蘭丸の話の聞いたり、それからまた、旅順攻撃の、坑道掘りの話を聞いて、「未来の地下戦車隊長」を夢みる岡部一郎は、たいへん教えられるところがあつた。全く、小田さんは、いい係長さんだ。

一郎は、その日も夕方、家へ帰ると、一時間ばかり、シャベルを持って穴を掘つた。その翌日も、朝起きると、シャベルを握つた。こうして続けているうちに、穴は段々深くなり、地上から三メートル位も深く掘れた。

或る日の夕方、一郎が、あいかわらず、人間地下戦車となつて、汗みどろに土を掘っていると、

「一郎さん、此頃このころしきりに土地を掘っているようだが、井戸掘りかね」

と、声をかけた者がある。

「ああ、お隣りの御隠居ごいんきよさんですね。井戸ではないのですけれど……」

「じゃあ、防空壕かね。防空壕が出来たら、わしも入れてもらいますよ」

「防空壕でもないんだけれど……」

「じゃあ、何だね」

「さあ、ちよつといえないんですよ」

軍機の秘密だ。母親にさえ、打ちあけてない秘密なのだから……

…。

「わかつているよ、一郎さん。防空壕だよ。防空壕が出来ても、わしをいれまいとして、そういうんだろう。わかつていますよ」

「いえ、御隠居さん、決してそうじゃありませんよ」

「いや、わかつています。わしには何でもわかつているんだ。しかしね、一郎さん。土を掘るのもいいが、地質ちしつのことを考えてみなくちや駄目だよ」

「地質ですって」

「今、掘っているのは、どういう土か、またその下には、どんな土があるかということを知っていると、穴は掘れないよ」

御隠居さんは、中々物知らしい。

「じゃあ、教えてくださいよ」

「わしも、くわしいことは知らんが、お前さんが今掘っているその土は、赤^{あかつち}土さ」

「赤土ぐらい知っていますよ」

「その赤土は、火山の灰だよ。大昔、多分富士山が爆発したとき、この辺に降って来た灰だろうという話だよ。大体、関東一円、この赤土があるようだ」

「はあ、そうですね。御隠居さんも、なかなか数値のうえに立っているようだな」

「え、なんだって」

一郎は、口を滑^{すべ}らせた。しかし、これは、説明しても、とても

御隠居さんには分るまいと思つて、だまつていた。すると御隠居さんは、

「赤土が二三十尺もあつて、それを掘ると、下から、青くて固い地盤じばんが出て来るよ。まるでひうちいし燧石のやわらかいやつみたいだ。

こいつは掘るのに、なかなか手間がかかる。しかし、そこまで掘れば、大体いい水が出るね」

「水なんか、どうでもいいのですよ」

「いや、こいつを心得ていないと、とんだ失敗をする。わしが若いころ井戸掘りやつていたときには……」

と、そこまでいったとき、御隠居さんは、自分の家の人に呼ばれたようである。（お爺さんじい、余計なことを言いなさるものじゃあ

りませんよ）（なあに、かまやしないよ、わしは、若いとき井戸掘りで渡世とせいしていたんだから）（だって、あまり名誉な仕事でもないわ）（そんなことはない。第一、お前もわしが井戸掘り稼かぎよ業うをしたればこそ、おまんまに事欠ことかかなかつたんだし、それに井戸掘りがなけりや、誰も水が呑めやせん。水が呑めなければ、飯がのどへ通るかい）などと一郎の頭の上で、大分やかましい話はながやりとりされていたが、やがて、御隠居さんの顔が、穴の上に現あわれて、

「おい、一郎さん。シャベルだけじゃ、穴は掘れないよ。うちに、つるはしがあるから、それをお使い」

「はい、すみません」

「そのうちに、わしも、腰の痛いのがなおったら、手伝うよ。昔とつた杵きねづかだからねえ」

「いえ、もうたくさんです。御隠居さん」

一郎は、一生けんめいに辞退した。老人ろうにんげん間の地下戦車なんて、どうひいき目に見ても、役に立たないであろう。それに、また腰が痛くなつたり、リユーマチが起つたりすると、今、いい合つていた口くちやかま喧けんしやの娘さんから、恨うらまれる。つるはしを借りただけで、応援の方は、ごめん蒙こうむることにしようと、一郎は思ったことである。

土はこび少年隊

つるはしは、すこぶる重かった。

（こんな重いものが、ふりまわせるかしら）と、始め隣りの御隠居さんから借りて来たときは心配した一郎だったけれど、そのつるはしをうまいことふりあげて、下ろすときにはつるはしの重味で、さつとふり下ろすと、うまい具合につるはしは土の中にくい込むのだった。あまり力も要らない。なるほど、つるはしを皆が使うはずだと、一郎は感心した。つるはしを使い出してから、横穴は、どんどん先の方へあいていった。その代り、実に厄やっかい介かいな

のは、土を地上へ上げることだった。むしろこの方に手間がとれた。といって、土をそのままにして置くと、いつの間にか、通路がふさがってしまつて、外へ出られない。土を退ける^のことが、たいへんな仕事であることが、しみじみと感じられてきた。

そこで一郎は、思い悩んで、ぼんやり考えこんでいると、弟の二郎が、遊び仲間の子供たちを沢山つれて、やってきた。

「ほらネ、防空壕だろう。うちの兄ちゃんが、ひとりで、こしらえているのだよ。どうだい、すげえだろう」

「二郎ちゃん。この防空壕には何人はいれるの」

「それは……それは、ずいぶんはいれるだろうよ」

「じゃあ、僕もいれておくれよ」

「だめだめ、信ちしんちゃんなんか。信ちちゃんは、ねぐるいの名人で、ひとの腹でも何でも、ぽんぽん蹴るといふから、おれはいやだよ」

「そんなこと、うそだい。その代り、僕、二郎ちゃんの兄ちゃんの手伝いをするぜ。うんと働くぜ」

「でも、そんなこと、だめだい」

「おい、二郎」

二郎が、後をふりかえった。

「なんだい、兄ちゃん」

「お前たちで、土をはこべよ。防空壕が出来たら、土をはこんだ人は、みんな中にはいつてもいいということにするから。その代り、土をはこばない人は、ぜったいに、いれてやらないよ」

「そうかい。おい、みんな聞いたね。じゃあ、みんなで土をはこぼうや」

「あたいも、やるよ」

「僕もやる。うちのお母かあちゃんがいったよ。防空壕ならうちでつくってもいいからよく見ておいでとき。僕ここで手伝って、家でもつくるよ」

二郎の友だちの少年が、土はこびを手伝うこととなった。防空壕が出来るといので、一郎の母親も、これを叱しからなかつた。また、今手伝っておけば、いざ空くう襲しゆうというとき、その中に入れてくれるといので、土はこびに参加する少年が日ましに数をまして来たのであった。

くすぐつたいのは、一郎だった。

（はじめは人間地下戦車の訓練をやるつもりだったけれど、これはとうとう防空壕をつくることになったぞ。しかし防空壕は必ず作らなければならぬものだし、それにこうしてみんなで土に慣れるということはいいことだ。とにかく自分は、まっ先に立つてやらなければならぬ）

そう思って、一郎は、半分は地下戦車をつくる上において土になじむためと、あと半分は、これを利用して、防空壕をつくるためと両方に目標をおいて、相もかわらず、穴の奥へはいりこんで、土を掘っていった。

「ははあ、これが本ものの赤土だな。本当に赤いや」

ぐさつと、シャベルを土の中に突き入れる。

「赤土は、きれいなものだ。おや、また、水が出てきたな。どうも、このへんに、地下水のみちがついているらしい。防空壕のほかに、井戸を掘ってもいいなあ」

ぐさつと、またシャベルを土の中に突きこむ。土が、天井から、ぱらぱらと落ちる。蠟燭ろうそくの灯が、ゆらゆらと、消えそうに揺れる。

「もう、ずいぶん掘った。このうえは、ちようど空地あきちになっていくはずだ。見当をまちがって、鬼河原おにがわらさんの家の下を掘ると、ひどい目にあうぞ。いつだか、鬼河原おにがわらさんの家令かれいとかいう人が、かんかんになって怒って来たからなあ、まあ、鬼河原さんの庭園

はよけて掘ることにしよう」

一郎はそう思いながら、つるはしをえいツとふるったが、そのとき天井の土がぱらぱらと大量に落ちて来たと思うと、ちよろちよろ音がして上から水が落ちて来た。はて、へんなことになったわい。

人間地下戦車の行先

地下壕ちかごうの天井てんじょうから、水は、ますますいきおいよく落ちてく

る。

「地下水にしては、いきおいがはげしいぞ」

と、岡部一郎は、げげんな顔で上の様子をうかがっていると、そのうちに壕の中が俄かに明るくなった。

「おやおや、へんだな」

と思つてみると、足許あしもとが、はつきり見えるではないか。手てきげ

提電灯でんとうの光で見えるのではない。もつと白々しらじらと、はつきり見える。そのうちに、壁をつたわって、なにかしら、いやに赤いものが、ちよろちよろと流れおちてきた。

「おや、いやに赤いものが、流れてきたぞ。このあたりは赤土の層だというが、いくら赤土にしても、すこし赤すぎるようだが：

…」

と、一郎は、ふしぎそうに、自分の足許へ流れて来たその赤いものを見てみると、それが、ぴんぴんと跳ねだしたではないか。

「あれエ、赤土が、跳ねるなどということが、あるだろうか。赤土が、魚になったのかしら……」

と、一郎は、まだ気がつかない。

「ほう、金魚のようだぞ。地下金魚——なんてものが棲すんでいるのだろうか」

一郎は、また顔をあげて天井を見たが、そのとき、大きな音がして、天井の土が、どしやりとくずれた。

「あっ！」

と、一郎が、とびのくのと、天井に、ぽっかりと明るい窓があくのと、ほとんど同時であつた。

「これは、へんだ。ひよつとすると……」

と思つてゐるうちに、その天窓てんまどが急にぐらくなつたかと思つと、大きな黒い材木のような怪物が落ちてきた。そして、一郎の足許で猛烈にあばれだしたから、さあ、たいへんであつた。一郎の顔も服も、泥水をぶっかけられて、目もあけていられない。跳ねている怪物は、目の下半メートルもあろうという大鯉おおごいだつた。

天井から、奔ほんりゆう流する水は、ものすごく、まるで天竜川てんりゆうがわのようであつた。一郎の膝の下は、たちまち水の中につかつてしまった。そうになると、もう、逃げだすことも出来なかつた。逃げ

だす路は、天井にあつた穴のほかはなかつた。

水は、いいあんばいに、腰のところどまり、それ以上はふえなかつたから、一郎は、かろうじて溺死^{できしにん}人とならないですんだ。彼は、シャベルとつるはしとを力にして、ずるずるする斜面を、天窓の方へのぼっていった。そこには、もう一郎の身体のはいるだけの大きな穴があいていた。

「よっこらしよ、よっこらしよ」

一郎は、斜面をのぼっていった。そしてついに、その天窓から、首を出してみた。

「うわッ」

きやーっという悲鳴が、彼の耳をうった。

「怪物だアーおい、逃げろ」

という声も聞えた。

だが一郎は、あまりに眩まぶしくて、しばらくは何も見えなかった。なんだか、ひろびろとした世界へ出ているらしいことはわかったけれど……。

「こりや怪物、そこうごくな。そちに、あいたずねるが、貴公は人間の性しょうをもったる者か、それとも、河童かっぱのたぐいであるか。正直に、返答をせよ」

へんな言葉づかいの聲が、岡部一郎の耳にきこえてきた。そのとき彼は、もう観念してしまった。ようやく事情が、はつきりしたのであった。地中を掘ってゆくうち、そういうことのないよう

に気をつけていたつもりであつたけれど、とうとうお隣りの鬼おにが河原邸わらていの泉水せんすいをこわしてしまつたのであつた。すなわち今彼に向つて「やあやあ汝なんじは人間の性しょうか河童のたぐいか」とどなつてゐるのは、鬼河原家の三太夫さんだゆう氏の声にちがいない。

「えらいことを、やつてのけたぞ。三太夫さんがびっくりしてゐるうちに早いところ逃げないとたいへんだ」

一郎は、ふたたび、

「うわーッ」

と、声をあげると、穴からとびだした。

なにごとが起つたかと、泉水の方をこわごわみていたお邸やしきの連中こぞは、泉水の中から、いきなり、泥まみれの小僧こぞうが、シャベルと

つるはしとをもつてとびだしたものだから、きもをつぶしてしまつた。奥へ逃げこむ者、その場にへたばる者、わめきちらす者のある中を、一郎は、自分の家の庭に生えている大きい櫨けやきの樹を見当にして、まっしぐらに走りだした。そして、お邸の垣根をこえて、自分の家の庭へ、とびこんだのであつた。

人間地下戦車事件の終幕だつた。

人間地下戦車が、お隣りの鬼河原邸の泉せんすい水をこわしてしまつたので、岡部一郎は、たいへん叱られた。

そのあげく、とうとうシャベルもつるはしも、一郎から取り上げられてしまったので、彼は、当分おとなしくしなければならなかつた。しかし彼は決して、地下戦車をこしらえ地下戦車長にな

ることを断念したわけではなかった。国防のために突進しよう
と決心した彼であった。誰に叱られようと、退却するようないくじ
なしの岡部一郎ではなかった。

信越線

さて、それから月日がながれた。そして、冬となった。

会社の主任の小田さんが、急に新潟県へ出張することになった。
それを聞いた一郎は、ぜひ小田さんについて行きたいとねがっ

た。彼は、東京育ちであつたから、新潟県というところを、見たくなつたのである。

それを聞いて、小田さんは、

「おい岡部、今ごろ新潟県へいっても、すこしも、おもしろいことはないよ。今は、雪ばかり降っているのだ。高田市などは、もう四、五メートルも雪が積つているという話だから、たいへんだよ」

小田さんは、一郎をつれていって、風邪かぜを引かせるといけな
と思ひ、そういつた。

「ぜひ僕は、いきたいんです。小田さん、僕は、雪がそんなに降つたところを見たことがないから、ぜひみせてください。それか

「僕は、もう一つ、ぜひみたいものがあるんです」

「もう一つみたいものって、なにかね」

「それはねえ、ラッセル車です」

「ラッセル車？」

「つまり、鉄道線路に積っている雪をのける機関車のことです。

いつだか、雑誌でみたのですよ。雪の中を、そのラッセル車が、

まるい大きな盤のようなものをまわして、雪を高くはねとばして

いくのです。すばらしい光景が、写真になって出ていた」

「ああ、そうか。それなら、ロータリー式のじよせつしや除雪車のことだな。

そんなものを見て、どうするのかね」

と、主任の小田さんは、また目をくしゃくしゃさせ、そしてし

きりに鼻の下をこすった。

「それは、いわなくても、わかっているじゃありませんか。僕、このロータリーとかいうのを見て、地下戦車をこしらえる参考にしたのです。だから、ぜひつれていってください」

「ははあ、そうか。やっぱり、そうだったのか。よし、そういうわけなら、所長に頼んで、なんとかしてやろう」

小田さんは、わかりの早い人である。そこで所長にうまく話こんでくれた。その結果、岡部一郎は、破格はかくの出張を命ぜられることとなった。

生れてはじめての遠い旅行である。小田さんと待ちあわせて、上野駅を夜行でたった。汽車は、たいへん混んでいた。

「岡部、安心して、ねなさい。朝になって、いいときに、私が起してあげるから」

小田さんは、一郎をねるようにすすめた。一郎は一時に気づかれが出て、まもなく、ぐっすりと寝込んだ。

朝は、早く目がさめた。一郎を起してくれるはずの小田さんは、まだぐうぐうねむっていた。一郎は、起きるとすぐ、手帳を出して白い頁ページをひろげた。そして万年筆を握って、何か書き出した。

「未来の地下戦車長、岡部一郎」

筆ひっぼく墨はなくても、未来の地下戦車長、岡部一郎と書くことを

お休みにすることはできない。

そのうちに、小田さんが、目をさました

「おやおや、もう習字をやっているね。そのうちにやめるかと思つたがなかなかつづくね。全く感心だ」

小田さんは感心をして、未来の地下戦車長のために、朝の弁当を買つてくれた。

除雪車を見たのは、その日のお昼ごろであつた。汽車は、雪のため、昨夜来、さくやらい やや速力がにぶつてきたが、とうとう午前十時ごろには、雪の中に停つてしまった。そして、向うから除雪車が来るのを待つこととなつた。

二時間ぐらいたつて、

「ああ、来た来た。ロータリーだ」

と、人々がさわぎ出したので、一郎はまだぐうぐうねむつてい

る小田さんをゆすぶり起して、外へ出た。線路の横の雪山のうえにのぼると、除雪車が黒煙こくえんをあげつつ、近づくのが見えた。ロータリーだ。ロータリーに当って、雪は、まるで瀑布ばくふのようにつくしく横へはねとばされる。壯観そうかんとは、このことであろう。中ちゆうくう空くうにかかる雪の瀑布は、だんだんと近づいてきた。こつちからは、車体はすこしも見えない。見えるのは、ただ雪と煙りとだけであつた。

除雪車が、そばまで来て停つたので一郎は、はじめて、除雪車の構造をよく見ることが出来た。ロータリーの歯車は、ぴかぴか光つていた。雪をはじめにかきこむ鋤すきは、ものすごく大きくて、前ひさしへ廂ひさしのように出ていた。一郎は、時間のたつのも忘れて、じつ

と見つめていた。

掘出した扇風機

新潟県から帰ってきて、一郎はすっかり考えこんでしまった。除雪車が、あんなに壮観なものとは考えていなかった。そして、つよい蒸気力を借りて、たくさん雪が、みるみる跳ね^はとばされていくところなどをみていると、地下戦車も、かならず出来なければならぬと感じた。

「地中を、あのロータリー除雪車のもっとしつかりしたようなもので、どんどん掘っていったら、きつとうまくいくかもしれない」
一郎は、なんとかして、そういう機械をつくってみたくて仕方がなかった。

しかし機械をつくるには、たくさんのお金が入用いりようであった。機関車一台でも、一万円ちかくかかるのであった。一万円などという大金を、一郎がつくれるはずがなかった。だから、さんねんながら、まにあわせに、模型もけいでもつくってみるほかないと思った。さて、模型をつくるにしても、なかなか費用がかかる。一郎のように、貧乏な家の子供は、お金のかかることなんか、出来ないのであった。といって、このまま指ひっこをくわえて引込んでひっこいるわけ

には、いかなかった。

一郎は、いろいろと思いなやんだ。ひとつ会社をやめて、もつと儲^{もう}かる仕事をはじめようかしら。

彼は、発明王エジソンの少年時代のことを思い起こした。エジソンの家も、たいへん貧しかった。しかし少年エジソンは化学の実験がたいへん好きで、もつともつと、自分の思うように、それをたくさんやってみたくて仕方がなかった。そこでエジソン少年は、まず新聞売子になった。新聞を売って、それで儲^{もう}けたお金で、たのしい実験につかう薬品を買うことにしたのであった。エジソンは、新聞を汽車の中や駅で売ったのであった。

そのうち、エジソンは、自分で新聞を発行することを考えた。

その方が、たくさん儲かるからであつた。彼は、汽車の中の一室を、その新聞の発行所にあてた。彼の新聞は、よく売れた。それで、彼の思うような薬品が買えた。彼は汽車の中で、化学実験をつづけたのであつた。くるしいけれども、たのしい日が、エジソンのうえにつづいた。或る日、汽車が揺れた拍子ひょうしに車内の薬品やぐひ棚なだなから、燐りんの壇たながおちてこわれ、たちまち燐は空気中の酸素と化合をはじめ、ぼーつと燃えだした。火事だ。汽車の中に火事をはじめたのである。火事を出したおかげで、彼は新聞を発行することが出来なくなつてしまった。——そんなことを、エジソンの伝記でよんだことがあつた。

「よし、僕は、やるぞ！」

エジソンのように、彼も自力じりきで働こうと思った。そしてもつと、たくさんのお金を儲け、そしてもつとたくさん時間を、地下戦車の研究につかえるようにしたいと考えた。

小田さんは、一郎の決心をきいて、いろいろと止めたけれど、彼の決心はつよかった。そして彼は、とうとう廃品回収屋さんを始めることとなった。一郎の母親をときふせることは、小田さんにたのんだ。

かがやかしき（一郎にいわせると）新体制への発ほっそく足であった。廃品回収屋さんといえ、今は、りっぱな国策商売である。この物資不足の折おり柄から、むだにすてられようとする物や、使われもせず家の中にしまいこまれた物を、買いあつめる商売だ。

こうして、これらの物を戦争につかう新しい物にかえるのである。立派な商売であつた。とうとう一郎は、車を引いて、町へ出るようになった。

「廃品は、ありませんか。こわれて役にたたないものがあつたら、売ってください」

彼は、熱心に、家々をまわつていった。

はじめは、つらかつたけれど、慣れるに従つて、これは面白い商売だと思ふようになった。そして或る日、扇風機せんぷうきのこわれたのを買いあてたときには、彼は、とびあがらんばかりに、よろこんだ。

なぜ、彼は、そのようによろこんだのであろうか。

「すてきだ！ このこわれた扇風機をなおして、それから改造するんだ。翼よくを、ロータリー除雪車のようになおし、それから台に車をつけると、おもしろいものが出来るぞ。廃品回収屋さんには、儲かる上に、こんなものが手にはいるなんて、いい商売だな」

扇風戦車失敗の巻

一郎は、扇風機を改造して、ロータリー除雪車に似たものを作ろうと決心したのであった。

故障の扇風機をしらべてみると、故障のところは、レバーの接触がよくないのだと分った。こんな故障なんか直すことは彼には、お茶の子さいさいである。

ロータリーの翼は、新造しなくてはならないので、ちよつと材料に困った。しかしそれも、木の板に、空缶あきかんのブリキ板を貼り、そのうえに、こわれた金具かなぐの中から、いいものをよつて、取付けた。すべて、一郎が商売であつてきたものの中から、自分に都合のよいものを、自分が使うのだから、こんな都合のいいことはない。

「この商売、ナカナカよろしい」

一郎は、ひとりで、よろこんでいる。そして、何日もかかって、

とうとうロータリー車の模型をつくり上げた。

「さあ、あとは、雪がふればいいのだ。雪よ早く降れ、早く降れ」と、一郎は、童わらべのように、雪の降るのを祈っていると、それから一週間ほどたって、雪が降った。天も、一郎をはげますためか、うんと雪を降らせた。東京地方には、めずらしいといわれる積雪一メートル半！

「あら、うれしい。いよいよロータリー式地下戦車の模も擬ぎ試し験けんだ！」

庭へ、例の扇風機を改造したロータリー車を置いた。そして、かねて買い込んでおいた夜よ店みせ用ようの防ぼう水すい電でん纜りょうを、家の中から庭まで引張り、その端はしに、扇風機のプラグをさしこんだ。あとは、

途中につけてあるスイッチをひねれば、このロータリー車は、雪を切るはずだった。

一郎は、もううれしくてうれしくて、ひとりでに、自分の顔が笑いだすので困ってしまった。

「さあ、ロータリー式地下戦車、進めッ！」

一郎は、そういつて号令をかけると、スイッチを押した。すると、はたして、扇風機——ではないロータリー地下戦車は、まわりだした。雪は八方にとびちった。

「しめたしめた。これで、雪の中を前進すればいいんだ。機関車の代りに僕が押してみよう」

一郎は、ぶんぶん廻っているロータリー車のうしろを手でもつ

て、積りつもつて堤のようになっていゝる雪の横よこ腹はらへ、

「進め、進め！」

と、ロータリー車を押しつけた。

ぱちぱちぱち、ぴちぴちぴち。

ロータリー車は、そんな音をたてて、積つた雪の中へ、まるまるとしたトンネルを掘るのであつた。

「ああ、愉快だ。ああ、愉快だ」

他人が見たら、一向おもしろくないことを、一郎は、愉快でしようがないという風に見えた。彼が、小一時間あまりも、それをつづけているうちに、どうしたわけか、ぷーんとへんな臭いがしてきたではないか。

「おやツ、へんな臭においだぞ。ゴム線が燃えるような臭いだ」

そのとき、彼は、やつと気がついた。ロータリー車を手許へひきよせ電動機の上にさわってみると、

「あつツ」

手がつけられないように熱い。そして、ぷーんと、ゴム臭くさにおいがし、白い煙が電動機の中から、すーつと昇っていることに、始めて気がついた。

「し、失敗しまった。電動機を焼いてしまった」

と、叫んだが、もう後あとまつりの祭だった。

電動機は、いつの間にか、まわらなくなっていた。どうして、こんなことになったのか。

後で、一郎が考えたところによると、これは、電動機が、むりやりにひどい仕事をさせられたため、焼けてしまったのであった。このような小さい電動機に、雪をかかせるのは、むりであった。雪がやわらかいうちはいいが、雪が固くなると、とてもいけない。そのうちに、線と線との間に火花がとんで、全くまわらなくなつたわけである。

彼は、あとでまた扇風機になおすつもりだったが、この失敗のために電動機の捲線けんせんをすっかりやりなおさなければならぬことになった。

失敗は失敗だが、彼の地下戦車研究は、一段とすすんだのであった。

「どうも、あのロータリーは、まずいやり方だ。除雪車なら、雪を外へはねとばしただけでいいんだが、地下戦車となると削けずった土は、自分が掘った穴へすてるしかないんだから、もつと考え直さなくては、だめだ。、どうしたら、いいかしら」

一郎は、失敗に屈くつしないで、もう次の研究を考えていた。地下戦車は穴を掘るだけでなく、削けずった土をどこにやるか、その始末をよく考えておかないと、実用にならない。

これは中々むつかしい研究問題である。一郎は、廃品回収の車をひきながら、それについていろいろと頭をしぼったが、どうもいい工夫がなくて困っていた。

そのうちに、春になった。

春にはなつたが、地下戦車の問題は、一向すすまなかつた。ところが或る朝のこと、彼は郊外を歩いているうちに、思いがけないおもしろいものを見つけた。

お百姓のおじさんが、もぐらを捕^{とら}えているのであつた。畠をあらすもぐらが、なぜそんなに彼の注意をひいたか。

岡部一郎ひるまず

岡部一郎はなぜ、もぐらをとっているお百姓さんを見て、よろ

こんだのか。

彼は、廃品回収車を、道ばたへおき放しにして、そのお百姓さんのところへ、のこのこと近づいた。

お百姓さんは、一郎のすがたを見ると、手を左右にふつった。

「あれツ、そばへいつちや、いけないのかなあ」

もぐらが、一郎にかみつくといけないと、お百姓さんは、しんぱいしているのであろうか。そんなことなら、何がこわくあるものかと、一郎は、かまわず、お百姓さんの方へ歩いていった。お百姓さんは、また手を左右にふつた。

「あれツ。ぼくが来ちや、いけないんですかね」

「なに？ 来ちやいけないというわけじゃねえが、今日はなにも

お払いはらいものがないということさ」

お百姓さんは、岡部一郎が、廃品回収屋の腕わんしょう章しょうをつけているのを見て、てつきりお払いものはないかと、ききにきたのだと感かんちがちいいしたのだ。

「ああ、そうですか。おじさん、ぼくは、屑はらやお払いものを、うかがいに来たわけじゃありませんよ」

「へえ、お払いをききに来たのじゃないのか。じゃあ、葱ねぎでも、分わけてくれというのかね」

「ちがいますよ。そのもぐらのことですよ」

一郎は、お百姓さんの足あしもと許もとにころがつているもぐらを指した。

「このもぐらに、用があるのかね。ははあ、商売ぬけ目なした。

もぐらの毛皮を売ってくれというのだろう」

「ああそうか。もぐらの毛皮は貴重な資源だな」

と、一郎は、一つものおぼえをしたが、

「ねえ、おじさん。ぼくは、もぐらの毛皮よりも、もぐらが、どうして、土を掘るのか、それを知りたいのです。どうぞ、おしえてください」

それをきいて、お百姓さんは、おどろいて目をまるくした。

「なんじや、もぐらが、どうやって、土を掘るか、知りたいというのか。なるほど、お前さんは、まだ子供だから、なんでもめずらしくて、そんなことが知りたいのだな」

「そうじゃありませんよ。ぼくは、今、地下戦車をこしらえよう

と思つて、一生けんめいになつてゐるんです。だから、土掘りの名人のもぐらのことを、ぜひ勉強して、出来れば、もぐら式の地下戦車をこしらえてみたいなあ」

一郎のいうことは、一郎にはわかつてゐるが、お百姓さんには、ちんぷんかんぷんだった。第一、地下戦車なんてものは何だか、さつぱり見当がつかない。ただ、この少年が、理科ずきと見え、たいへんねつしんに、もぐらの話をききたがつてゐることだけは、わかつた。

「このもぐらというけだものはこんなかわいい顔をしているが、悪いやつじゃ」

と、お百姓さんは、足で、もぐらの腹を、ぽんとつけた。もぐ

らは、くるつと腹を上に出した。もぐらは、すこしもうごかない。

「このもぐらは、死んでいるの」

「うん、もぐらは、すぐ死ぬるよ。お陽さまにあたれば、すぐに死んでしまうのだよ。だから、昼間はじつと土の中に息をこらしめていて、夜になると、ごそごそうごきだして、作物をあらすわるい奴じゃ」

お百姓さんは、もぐらの悪口ばかりをいった。しかしもぐらは、畑の害虫をたべるから、お百姓さんのためにもなっているのだ。

「おじさん、もぐらは、どういう具合に、土を掘るの」

一郎は、大事なことを、たずねた。

「さあ、それはよく知らんねえ。しかし、もぐらの鼻は、かたく

て、ほら、こんなにとがっているだろう。それから前脚なんか、こんなに掌てが大きくて、しかも外向きそとむについているだろう。つまり、鼻と前脚とで、やわらかい土を掘るのにちがいないよ」

お百姓さんは、自分の知っているだけのことをいった。一郎は、うなずいて、

「おじさんは、もぐらが土を掘っているところを、そばに立ってみていたことがあるの」

と、きいてみた。

「ばか、いわねえもんだ。土を掘るのは夜中だというのに。わしはな、こう見えても、夜中に、わざわざ土を掘るところを見にくいようなばかじゃねえぞ」

一郎は、それはほかではなくむしろかしこいのだと説明したが、お百姓さんには、それが一向に通じなかつた。

そこで一郎は、自分は、もぐらが土を掘るところを見て、もぐら式の戦車をつくりたいからお百姓さんに、生きているもぐらを、できるだけたくさん、つかまえておいてもらいたい。もぐら一頭につき、五十銭ずつで買うから頼みこんだ。

「ええ、それは本当かね。一頭につき、本当に五十銭だな」
お百姓さんは、きげんをなおして、にこにこ笑いだした。

もぐらがつかまったら、お百姓さんは、一郎のところへ、ハガキをくれることになっていた。

一郎は、生きているもぐらを買って、どうするつもりであろうか。

それから四五日たって、お百姓さんから、ハガキが来た。もぐらがたくさんとれたから、至急、買いに来てくれというのである。一郎は、さつそく、車をひいて、お百姓さんのところへいつてみた。

「こんちは。もぐらが、つかまったそうですね」

お百姓は、畑をたがやしていたが、一郎を見ると、鋤くわをそこへおいて、やってきた。

「はあ、本当に来たね。お前さんは、本当に、五十銭ずつで買ってくれるのかね」

「大丈夫、本当です」

お百姓は、しきりに念をおすのだ。

「皆、買うかね」

「それはもちろん。皆買います。多いほど、うまくいくと思うから」

「よし。じゃあ家へ来なせえ。納屋なやに入れてあるから」
お百姓さんにつれられて、一郎は、その家へいった。大きな百

姓家だった。この辺で、一番大きいお百姓さんだということだった。

お百姓さんは、納屋の戸を、がらがらとあけて、中にある大きい箱を指した。

「この箱の中にはいつているよ。中へ、光がさしこまないように、よく目ばりをしてあるが、これだけ頭数をそろえるのに、わしは、ずいぶんくろうしたよ」

「へえ、そうですか。それで、皆で、幾頭はいつているのですか」
一郎は、もぐらの数をたずねた。

「そうだなあ。数えちがいがあるかもしれんが、すくなくとも、二十六頭は、はいつているよ」

「へえ、二十六頭。あの、もぐらが………」

二十六頭のもぐらが、はいつているときかされ、一郎は、さすがにおどろいた。彼は、せいぜい四五頭だろうとおもっていたのである。

「二十六頭とは、ずいぶんな数ですね」

「そうだよ。わしは、こんな骨折ったことはない。おかげで、このあたり一帯のもぐら退治ができたよ。どれ、はつきりした数をかぞえてみようか」

お百姓さんは、懐中電灯をつかって、箱の中のもぐらの数をしらべた。

「ああ、わかったよ。二十六頭じゃなかった」

「はあ。少なくとも、やむを得ません」

「いや、もつとたくさんだ。皆で、ちようど三十頭ある」

「えつ、三十頭？ 一頭五十銭として、皆で、ええと十五円か」
「にいさん。どうも、すみませんね」

「いや、どういたしまして……」

一郎は、十五円也なりの、もぐら代には、おどろいたが、正直なお百姓さんと約束したことから、どうも仕方がない。ちゃんと十五円を払って、三十頭のもぐらのはいった箱を、車のうえにつんだ。

「お前さん、三十頭ものもぐらを、どうするつもりかね。やつぱり、毛皮をとるのだろうか……」

「いや、毛皮のことは、考えていないのです。ところで、おじさん。どこか、ひろびろとしたところは、ありませんかね。もちろん、畑みたいところは、だめです。なるべく、木のすくない、そして土がやわらかで、草は生えていてもいいが、あまり草がながくのびていないところは、ないでしょうか」

「さあ、どこだろうなあ。一体、そこで、何をしなさるつもりじやな」

「ええと、それは、まあ、こっちの話なんですけど、とにかく、そんな場所があったらおしえて下さい」

「そうじやなあ。ひろびろとして、木がなく、土がやわらかで、草がみじかいところというところ……」

お百姓さんは、しばらく首を曲げていたが、やがて、とんと足をふんで、

「あるよ、あるよ。この道を、むこうへ、一キロばかり行って、左を見ると丘がある。まわりには松の木が生えているが、その丘の上は、三十万坪もあつて、たいへんひろびろとしている。そこがいいだろう」

「そんなところがあるのですか」

「いつてみなさい。あまり人がいないよ」

生きている地下戦車

その夜、一郎は、もぐらのはいつた箱を、車にのせて、お百姓さんにきいたその丘のうえへいつてみた。ぼんやりと西の空に、月が出ていた。なるほど、そこは、ひろびろとしている。三十万坪はあろう。

芝草らしいものが生えているが、草は、同じくらいに、短くか
られている。ねころがっても、いいようなどころであった。

「これは、いいところだなあ。ここなら、もぐらを放すのには、
もつてこいの土地だ」

一郎がもぐらを買いしめたわけは、夜になって、もぐらを放つ

て、生きている地下戦車であるもぐらだが、土を掘るところを見つもりだったのである。

「草のみじかさかげんも、これならおあつらえ向きだ。もぐらさん、さあ放すから、どんどんここを掘ってみておくれ」

一郎は、車のうえから、箱を下ろして、その入口を開いた。箱のうしろを叩くと、もぐらは、おどろいて、われがちに、せまい入口からぞろぞろと、とびだした。

淡い月光の下に、草原をもぐらの大群が、突撃隊のように、ころころと、はっていくところは、なかなか風ふうがわりな風景であった。一郎は、地下戦車長になる前に、もぐら隊長になろうとは、ゆめにも考えていなかった。

一郎は、十五円のもぐら隊のあとから、にこにこ笑いながら、様子を見まもっていた。

なにしろ、もぐらの数は多いし、それに、ここは、べらぼうにひろいから、もぐらの行方を、いちいちしんぱいする必要はなかった。いずれそのうち、もぐらのどれかが土を掘りだすだろうか、そうしたら、そのもぐらのそばへ行って、彼の地下進撃ぶりを観察すればいいのであった。

もぐらの大群は、まっくらな一かたまりになって、青草のうえを、はいまわっている。永いこと車にのせられたので、まだおどろいているらしい。一郎はそり身になって、もう西の森かげに落ちそうな淡い片われ月を見上げた。

「ああ今ここに、高度国防国家日本建設の、かがやかしき歴史が、くりひろげられていくのだ。

だがぼくの外ほかに、だれも、それを知っている者がないのだ。

ああ、なんとという神秘しんぴな夜であろう。——だが一体、ここは、ばかにいいところだ。こんないいところを放っておかないで、家でも建てたらいいだろうに、おいしいことだ」

一郎は、詩情にかられたり、それからまた土地監理かんり案を考えた
り——。

そのうちに、もぐらの群が、なんだか、大きくなったように見えた。それはへんなことだから、そばへいつてみると、どうであろう。もぐらはそれぞれ、草原くさはらに穴をあけて、中へもぐりこん

でいるではないか。中には、もう一メートルちかい穴を掘り、草原のうえに、土をもりあがらせているものさえいた。

「さあ、しめた。生きている地下戦車隊が、地下進撃をおこしたぞ」

これから、いよいよ、もぐらのお手並拝見である。一郎は、懐中電灯をつけて、そつと、もぐらのそばによつた。

草原が、むくむくともりあがってくると、つづいて、くろい土があがってくる。下では、もぐら先生が、汗だくで、活動しているのであつた。だが、中はよく見えない。

そこで一郎は、もつてきた杖のさきで、もぐらをおどかさないうようにそつと土をどけた。すると月光と懐中電灯の光がもぐらの

背をてらす。もぐら先生は、急に光をあびて、びっくり仰ぎょうてん天、大いそぎで、土の中にもぐりこむのであった。

「ああ、やっている、やっている」

一郎はかんしんして、もぐらが、あわてふためいて土を掘るのを、のぞきこんだ。

「なるほどなあ。もぐら戦車は、はじめ、あの先のとがったかたい鼻で、土を掘りくずし、それから前脚をつかって、その土を、うしろへかき出す。なるほどねえ、上手なものだ。ふうん、かんしんしたぞ」

一郎にほめられていることもしらず、もぐら先生は、まぶしくて苦しくてたまらない。だから、命がけで、土を掘るのだった。

「これは十五円出した値うちがあつたぞ。なかなか参考になる。

これでもぐらが、象ぐらい大きかったら、本当の戦争に、もぐら隊をつかつたかもしれないねえ。ふーん、かんしんした」

一郎は、さかんに、かんしんしていたが、かくしから、帳面を出すと、もぐらの活動ぶりを写生しはじめた。

設計命令下る

話は、それから、急に五年先へとぶ。

岡部一郎は、今やりっぱに成人して、ある機械化兵團きかいかがへいだんの伍長ごちよになつていた。

これは、一郎が、少年戦車兵を志願して、めでたく入隊したことに、この躍進の道が、ひらけたのであつた。一郎は、まじめで、ねっしんだから、いつも、模範兵であつた。

選抜試験をうけると、そのたびに通過し、まだ年も若いのに、その冬には、伍長になつた。

今でも彼は、毎朝營舎えいしやで目をさますと、まず真先まっさきに宮城みやぎを遥拝ようはいし、それから「未来の地下戦車長、岡部一郎」と、手習てならいをするのであつた。演習えんじゆにいつているときには、土のうえに木の枝などをつかつて、書くこともあつた。

当時、一郎の隊長は、加瀬谷少佐かせやしろうさであつた。少佐は、一郎に目をかけて、特にきびしく教育をした。他の兵が、遊んでいるときも、一郎は少佐の前に坐つて、いろいろむつかしい数学や技術の教育をうけた。それからまた、ときには、外国の研究などについても、少佐は、知っているだけのことを、話してきかせた。

ある日のこと、加瀬谷少佐は、若き岡部伍長をよんで、いった。「岡部伍長。今日は、お前に、問題をあたえる。相当困難な問題ではあるが、全力をあげて、やってみろ」

「はい」

「その問題というのは、一、最も実現の可能性ある地下戦車を設計せよ——というのだ」

「はい、わかりました。一、最も実現の可能性ある地下戦車を設計せよ」

「そうだ。一つ、やってみろ。今から一週間の猶予ゆうよをあたえる。その間、加瀬谷部隊本部附勤務を命ずる」

「はい」

一郎は、それをきくと、もう胸の中がうれしさ一ぱいで、ろくに口もきけないほどだった。

「では、引取ってよろしい。明日から、早速さっそくはじめるのだぞ」

「はい。自分の全力をかたむけて、問題をやりとげます」

岡部伍長は、げんしゆく厳肅な敬礼をして、よき部隊長の前を下がった。

さあ、たいへんである。

これは、今までのように、彼の趣味だけの仕事ではない。軍からの命令であった。国軍のために、実戦に役立つ地下戦車を設計するのだ。たいへんな任務であった。

彼は、早速その夕刻、さつそく ゆうこく 原隊げんたいから、所持品一切をもつて、隊本部へ移った。

彼のために、一つの部屋があたえられた。それは、やがて倉庫になるらしい木造のガランとした部屋であった。

夕食が済むと、彼は、下士官集会所へも顔を出さず、この新しい部屋へもどつてきて、電灯をつけた。

彼は、どこから手をつけようかと考えながら、ひろい部屋の中

を、こつこつと靴音をさせながら、あるきまわった。

彼は、ふと、窓のそばによつた。凍りこおついたつめたい窓硝子まどガラスの向こうに、今、真赤な月がのぼりつつあつた。

ああ、月がのぼる。

「月を見ると、思い出すなあ」

と、岡部伍長は、ふと、ひとりごとをいった。

「ゴルフ場ともしらず、三十頭のもぐらを放して、もぐらが土を掘るところを研究したあの夜、あの月を見たなあ」

もぐら事件のことを思うと、たのしいやら、おかしいやらであつた。

彼は、あのだだっぴろいうつくしい大草原だいそうげんが、ゴルフ場だと

は、気がつかなかっただのであった。ゴルフ場と知ったら、もちろん、もぐらを放つ^{はな}ような、そんならんぼうなことをやらなかつたろう。それがゴルフ場だとわかったのは、あの事件が、新聞に出てからのことであつた。

その新聞記事というのが、ふるつていた。

〃〇〇ゴルフ場の怪事件、某^{ぼうこく}国^{らっか}落^{さん}下^{たい}傘隊の仕業か、多数のもぐらを降下さす〃

彼には、すっかりわけがわかつていたからこの新聞記事を読んでいるうちに、ふきだしてしまった。

だが……。

あのゴルフ場の番人が、真夜中になって、クラブハウスの窓か

ら、はるか向こうのゴルフ場の一隅に、怪火がゆらぎ（これは一郎のもっていた懐中電灯のことだ）それから朝になってみると、約百頭のもぐらが、折角せっかく手入れしてあつたゴルフ場のフェアウェイを、めちやめちやに掘りかえしてあつたというのだ。

百頭とは、話が多すぎる。

とにかく、このように多数のもぐらが、一時に、ゴルフ場へ匍はいこむ筈はずがない。だからこれはきつと、空中から落下傘で、もぐらを下ろしたのであろう。

その目的は、どんなことか、さっぱりわからないが、あの怪火は、落下傘隊員がふりまわしたものであろう——と、まことしやかに報じていた。

「あれは、おかしかったなあ。——しかし、それはそれとして、おれはやっぱりもぐらを基本とした地下戦車を設計するぞ」

岡部伍長は、自信あり気に、ひとりごと独言した。

ぼうがんし
方眼紙

岡部伍長は、仕事はじめの夜に、窓から見たまんまるい月のことを、いつまでも忘れられなかった。

その夜、彼は午後九時まで、地下戦車の設計に、頭をひねった

のであった。その結果、どんなものが出来たであろうか。岡部の机のうえには、大きな方眼紙ほうがんしがのべられ、そのそばには、さきをどがらせた製図鉛筆が三本、置かれてあったが、午後九時、彼が寝台しんたいへ立つまでに、その方眼紙のうえには、一本の線も引かれはしなかった。

「むずかしい。とても、むずかしい！」

さすがの岡部伍長も、太い溜息ためいきとともに、憂鬱ゆううつな顔をした。ふだん、こんなものが出来たらいいだろうと思うがとか、そいつは、こんな恰好かつこうのものになるだろうとか、頭の中で、あそび半分に考えているときは、思いの外ほか、まとまった或る形が、うかびあがってくるものだが、さあ本当にこしらえてみよということ

になると、手をつけるのに、なかなか骨が折れる。

それはそのはずである。実際につくるとなると、車輪一つのことだって、正しい知識が入用いりようになるのだ。錐きりをつかえばいいと分つていても、しからば、実際にはどんな形の錐にすればいいのか、その錐をうける土のかたさは、どんな抵抗しょうを生じるものであろうか。錐をうごかす動力は、どのくらい入用で、どんなエンジンを使えばいいか等々、かぞえ切れないほどの問題が出てくるのであった。

それだけではない。こつちをたてると、あつちがたたないことがまた問題となる。土をけずる錐は、大きいほどいいわけだが、錐を大きくすると、こんどは地下戦車自身が大きなものになって、

地下の孔あなをくぐることがむずかしく、速度も出なければ、馬力ばかりたくさん要いって不経済のようにも思う。こつちをたてて有利にすれば、あつちがたたなくなつて不利となるのだ。

「うわーい、いやになつちまうな」

岡部伍長は、線一本引いてない方眼紙の上をにらみつけながら、丸まるがり刈のあたまを、やけにガリガリとかいて、寝所しんじよへ立つた。

寝台へもぐりこんだが、もちろん岡部伍長は、ねむられなかつた。

「ええと、どうしてやるかな。形は、どうも土龍式もぐらしきがいいと思うのだが……」

もぐらの鼻の代りに、円錐形えんすいけいの廻轉錐かいてんきりをつかうのがいいと、

はじめから思っていた。しかしそれをどうして廻すか。それを廻して、はたして土はけずれるか。けずれても前進するかどうか。それから第一、廻転錐を廻す動力をどうするのか。また、けずりとられた土をどうするのか。——岡部伍長の頭の中は、麻のよう
にみだれた。

みなさんだったら、このような問題を、どう片づけれますか？

岡部伍長は、寝ぐるしい一夜を送った。

彼は、すこしも睡ねむれなかつた——と思っていた。

しかし、夜中に営内の巡しゅん視が、彼の寝ている部屋へも廻ってきたとき、彼、岡部伍長は、たしかに眼をとじ、ごうごうといびきをかいて寝ていたそうである。

(この男は、えらいいびきだな)

巡視の士官しかんは、苦笑をして、後に従っている下士官かしかんをふりかえつた。

(は、よく寝とります)

すると岡部は、むにやむにやと口をうごかし、(…あ、そうか。もぐら君、君の鼻に、ドリル錐を直結すれば、よかつたんだな。なあんだ、わしや、そこに気がつかなかったよ。はははは)

と、気味のわるいこえをたてて、岡部は笑った。そして、とたんに、くるりと、寝がえりをうって、また、ぐうぐうと寝こんでしまった。

士官と下士官とは、思わず目と目を見合わせた。

(夢を見て、寢言をいっとるようじゃが、あれは一体なんじゃ)

(さあ、もぐらがどうかしたといっております。報告書に書いて置きますか)

(ふむ。——いや、それにもおよばん。毛布もうふをよくかけといてやれ)

熱心な投書

巡視の士官たちが、戸口から出ていってしまふと、岡部は、そ

の物音に夢をやぶられたか、ぱつと毛布をおしのけて、寝台のうえに半身をおこした。

「ああ、成功。大成功だ。すばらしい考えを思いついたぞ！」

彼は、寢言ではなく、はつきりとものをいって、いそいで寝台を下りた。上靴じょうかをつっかけて、彼は、とことこと歩きだしたが、五六歩あるいて、急にはつとした思いいれで、その場に立ちどまり、

「……忘れないうちに、いまのすばらしい発明を手帖に書きとめて置かなければならないと思ったが……ちえつ、なあんだ、ばかばかしい。わはははは」

彼は、だれも見えていないのに、きまりわるげに、あたまを、ガ

リガリとかいて、寝台の方へ廻れ右をした。そしてまた、毛布の中に、もぐりこんだ。

「ちえつ、夢だったか、ばかばかしい。行軍していると、水車小屋のかげから現れたもぐらというのが、体の大きいやつで牛ぐらいいあるもぐらの王様だったから、こいつは使えるなど思ったんだ。そのもぐらの先生め、わしの鼻に廻かいてんきり転錐を直結しなさいという。なるほど、これは何というすばらしい考えだと……いや、目がさめてみれば、あれまあ、なんというばかばかしい夢をみたもんだな！ な、なあーんだ」

彼は、毛布の中で、くつくつと、いつまでも笑いがとまらなかつた。

その夜は明けて、翌日となった。

岡部伍長は、腫れぼったい^{まぶた}瞼をこすりながら、また自分の机にかじりついた。

「きょうこそは、なんとか形をこしらえなければ……」

と、彼は、がんばりはじめた。

だが、その日も正午になったが、彼が睨^{にら}んでいる方眼紙の上には、やはり一本の線も引かれなかった。

こうした日が、三日間続いた。しかも彼は、方眼紙の上に、あいかかわらず一本の線も引くことができなかった。頭をつかいすぎたことと、夜眠られないためとで、さすがの彼も、半病人のようになつてしまった。

その日の午後、加瀬谷少佐から電話がかかってきて、すぐ部屋へ来いということだった。はい、まいりますと応こたえたものの、岡部は、たいへん憂鬱ゆううつだった。きつと隊長は、三日間の結果を報告しろといわれるであろうが、彼は、報告すべき何物ももっていないかった。報告すべき何物もないということは、遊んでいたと同じだと思われるも仕方がない。彼は、いやでいやで仕様しやうがなかったけれど、隊長に命令で呼ばれて、いかないわけにもいかなかつたので、唇をかみしめながら、隊長室の扉を叩いた。

加瀬谷少佐は、待っていた。そこへ入っていった岡部の顔を見ると、少佐は、いちはやく万事ばんじを察したが、それとは口に出さず、「おい岡部。わしのところへ、このような投書が廻ってきたよ。」

民間にも、地下戦車をつくることに熱心な者があると見えて、これを
見よ、田方松造たがたまつぞうという少年から、地下戦車の設計図を送つてよこした。よく見て参考になるようだったら、使うがよろしい。

「はい」

「こういう図面だが、どうじゃ、うまくいくと思うか」

そういつて、加瀬谷少佐は、封筒の中から一枚の紙をとりだし、それをひろげた。その紙面には、別記のような田方式たがたしき地下戦車「第一図」が描えがいてあつた。

この戦車は、頭のところが、例のロータリー除雪車に似た廻転のこぎり鋸のこぎりになつていて、そのうしろに、車体があり、後方は流線りゆうせん型がた

になっていた。そして車体には、小さな車輪が左右で十二個つき、なかなかいい恰好かつこうであつた。

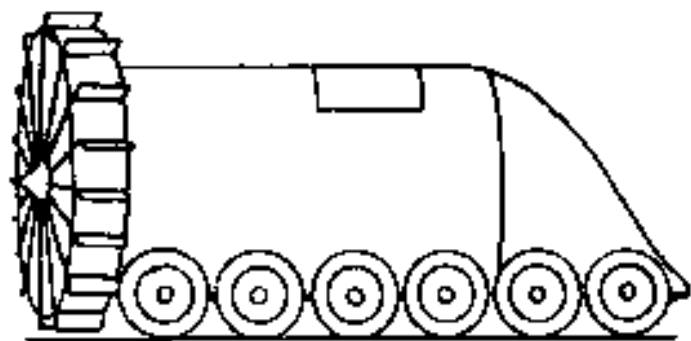
「どうだ、岡部。これは実現できるか、どうか。お前の意見は、どうか」

加瀬谷少佐は、かさねて、岡部にたずねた。

「はい。これは、前進しないと思います」

「前進しない。なぜか」

「たとえば、これを山の中腹に突進させたいたします。なるほど、この廻転鋸がまわれれば、周囲の土をけずりますが、しかし前方の土をけずりません。ですから、この車体で前方へ押ししても、前方から押しさえされませんから、前進出来ません」



第一圖

「なるほど。では、これを如何に改良せばよろしいか」

「自分の考えとしましては、この先の廻転鋸は力がありませんから、鋸でなく、錐きりにかえた方が有効だと思えます」

「錐か。どんな形の錐を用いるのか。ちよつと、これへ描いてみよう」

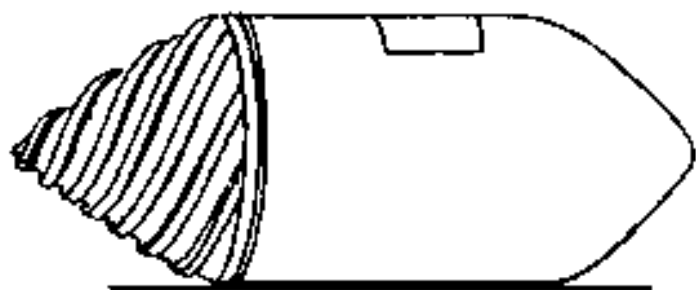
「はい」

少佐に命令されて、岡部は、ちよつとたじろいだが、ぐずぐずしていることは出来ないのです、鉛筆をとりあげた。そして、かんたんな図ではあつたが、咄嗟とつさに浮んだ形を、そこに描いてみた。

〔第二図〕

「なんだ、これは？」

芋いもか葉卷煙草はまきたばこかという恰好だな」



第二圖

と、少佐は、にが笑いをして、岡部伍長の顔を見上げた。

第一号の試験

「はい。すこぶるかんたんではありますが、これなら、前進する自信があります」

岡部伍長の顔は、真赤にほてっている。

「どういうのかね。説明をきこう」

「はい。この大きな部分が、車体であります。エンジン、乗員、

その他武装もついているのであります。この前方の三角形は、実は円錐形えんすいけいの廻転錐かいてんきりを横から見たところでありまして、これが廻転するのであります。自分の最も苦心しましたところは、この回転錐であります」

「ほう、ここを苦心したか。どういう具合に苦心したのか」

「はい」

と岡部はいつたが、まさか夢に見たもぐらの話をするわけにもいかないのです、

「……ええ、要するに、この円錐形の廻転錐はふかく土に喰くい入り、土をけずりながら、車体を前進させます」

「なるほど、ぎりぎりど、ふかく喰くいこみそうだな。車体が、大

根の尻尾のように、完全な流線型りゆうせんがたになっていようだが、これはどうしたのか」

「はい。これは、錐のためけずりとられた土が車体のまわりを滑すべって後方へ送られますが、送られやすいためであります」

「そうなるかなあ」

と、少佐は、首をひねった。

「少佐どの。けずられた土は、どんどん後方へ送られますが、そこに或る程度の真空が出来ます。ために、土は、とぶようにますます後方へ送り出されると考えます」

「ふむ。これだけかね。ほかに何か、附属品はつかないのか」

「いいえ、つきません。これだけでたくさんであります」

「それはすこし乱暴だぞ」

「自分は、そうは思いません。これで大丈夫だと思います」

「そうかなあ」

加瀬谷少佐は、しばらく考えこんでいたが、

「ふむ、なにごととも勉強になることじゃから、大至急、それを実物に作らせてみよう。そして、その上でお前は、運転してみるのだ」

「は、承知しました」

机上きじょうで、念には念を入れ、ふかく考えてみることは、大いに

必要であるが、しかし考えただけで万事が解とけると思つては、大まちがいである。つまり、考えただけでは、解けないことがあるの

だ。それを考えに迷いこんで時間におかまいなしに、いつまでも考えていると、結局そのものは、解けない問題ばかりがあまりにふえてきて、泥田どろたへ足をふみこんだように、ぬきさしならぬこととなる。

だから、考えるのも、或る程度にとどめなければならぬ。そして早く、実物をつくって実行してみることが、解決を早くする。そのうえ、実物をつくって実行してみると、机の上では、とても気がつかなかったような困難な問題がひよこひよこことびだしてきて、行手ゆくてを阻はばむものである。そこをのりこえなければ、本当に役に立つものは出来ない。

それから三ヶ月の間かかって、岡部伍長がはじめて設計した地

下戦車が、こうしよう工 廠 の中で、実物に仕上がった。

さあ、いよいよその試運転の当日である。

防 諜ぼうちよう のこともあるので、その地下戦車第一号は、嚴重なお

おいをかけられ、夜行列車に積まれ、東京から程近い某県下の或る試験場へ届けられた。

ここはその試験場であるが、見渡すばかりの原野げんやであつた。方々に、塹壕ざんこうが掘つてあつたり、爆弾のため赤い地層のあらわれた穴が、ぽかぽかとあいていたり、破れた鉄条網てつじようもうが植えられてあつたり。

試験に従事するのは、加瀬谷少佐を隊長に、ほかに一ヶ小隊の戦車兵であつた。

問題の地下戦車第一号は大型の二台の牽引車に鋼条こうじょうでつながれ、まわりを小型戦車にまもられながら、ひきずられて、いった。その大きさは、三十トン戦車ぐらいのものであった。

岡部は、もちろん、その地下戦車の中に入り、座席にしがみついていた。

試験をするのに、ちようど、都合のいいように、土地が切り開いてあった。

「さあ、その斜面に、地下戦車の鼻さきをつつこんでやれ」
少佐は、ときどきにたりと笑いながら、部下を指揮した。

なにしろこの地下戦車は、土の中ではどんどん走るのかもしれないが、地上では、進退が甚はなはだ自由でない。それというのが、こ

の戦車には、地上を走る車輪さえついていないのであった。

「どえらいことになりましたね」

少佐のそばに目を丸くして立っていた萱原かやはらという古強者ふるつわものの小隊長が、少佐に向っていったことである。

危険信号

「なにごとくも、体験じゃ。とはいうものの、この地下戦車を目的物にあてがってやるまでに、いやに世話がやけるねえ」

「はあ。やっぱり、これは車輪がいりよう入用ですなあ」

「岡部伍長は、この次には、車輪をつけるといいだすだろう」

「いや、少佐どの。この次には、岡部は、砲弾みたいに、火薬の力でこの地下戦車を斜面へうちこんでくれなどいい出すのじゃありませんかなあ」

「うむ、いいだしかねないなあ、岡部のことだから……」
そのうちに、用意が出来た。

地下戦車の鼻さきが、やわらかい赤土の中にすこしばかり入った。そして牽引車けんいんしゃは、後に退いた。

「では、始めます」

地下戦車の蓋ふたがあいて、岡部伍長が顔を出し、信号旗をふった。

加瀬谷少佐は、それにこたえて、手をふった。

岡部が中に引込むと、また一つの首が、出てきた。そして手をふった。

「やあ、ご苦労！」

それは、同乗を命ぜられた工藤上等兵くどうじょうとうへいだった。

「萱原かやはらじゅんい准尉。工藤は、命令をうけて、別にいやな顔をしなかつたか」

「いや、大悦おおよろこびでありました。工藤上等兵と来たら、生命を

投げだすようなことは、真先まつさきに志願する兵でありまして……」

「ははは、まさか、今日のところは、一命には別条べつじょうはあるま

い」

「そうですね。私は、心配であります」

そういつているとき、地下戦車の蓋は、ぱたんと閉った。車体のうしろの排気管はいきかんから、白い煙が、濛々もうもうと出てきた。

「うむ、いよいよ出るらしい」

加瀬谷少佐をはじめ、試験部隊の一同は、固唾かたずをのんで、問題の地下戦車の上に視線をあつめる。

そのときであった。

岡部伍長の乗った地下戦車が、ぶるぶるんと震ふるえたようである。ぎりぎりという音がして、戦車の頭部から、土がぱらぱらとどびちる。

円錐形の廻転錐が、いよいよ廻転をはじめて、赤土をけずりだ

したのであった。

「ああ、もぐっていくぞ。案外、いいね」

加瀬谷少佐は、戦車のはねとばす土を、頭からかぶりながら、熱心に、地下戦車の廻転錐のところを注視^{ちゆうし}する。

ぶるぶるん、ぶるぶるん。ぎりぎり、ぎりぎり。

地下戦車は、すさまじく土をはねとばしながら、すこしずつ、斜^{しゃめん}面の土中^{どちゆう}につきすすんでいった。

「やるやる、すごいぞ」

そのうちに、土が、とばなくなってしまった。それは地下戦車が、頭部をすっかり土中に入れてしまったからである。

「おお、これからいよいよ本当の前進じゃ。うまくいくかな」

少佐は、手に汗を握っている。

萱原准尉は、自分が運転をしているかのように、額ひたいに汗をにかやかはらはら
じませて少佐と並んで、地下戦車のうしろから覗のぞく。

地下戦車は、それから更に深く土中に入りこんだ。おおよそ、全長の三分の二ばかりが、土中にはいりこんだのであるが、それつきり進まなくなってしまうた。

「おや、進まなくなつたぞ」

「エンジンは、かかっているのですが……」

「そばへいって、車体を叩たたいて、聞いてやれ」

「はい」

萱原准尉が、とんでいって、いわれたように車体を上からどん

どん叩いた。

「おい、岡部伍長、どうした？」

ところが、それには返事がなかった。

しかしそのとき、エンジンの響は、さらに一段と大きくなった。

全馬力ぜんばりきを出しはじめたものらしい。

「おい岡部。どうした！」

かさねて、萱原准尉が、とんとんと車体を叩いた。

然ししか、応えこたはない。

そのうちに、准尉は、びっくりしたようなこえをあげた。

「おや、これは、へんだぞ」

「どうしたのか、萱原」

「ああ、そうか。車体が廻っているのです。車体が左に廻っております」

「なに、車体が左へ廻っている。それはたいへんだ。それじゃ、ちゆうがえ宙返りをやっているのじゃないか。飛行機じゃあるまいし、戦車の宙返りは、感心しないぞ。岡部伍長、なにしとる！」

そのうちに、戦車の排気管から、赤い煙が濛々もつもつと出て来た。そしてエンジンが、ぱたりと停ってしまった。少佐は、それをみて、大きくうなずき、

「ああ、あれは危険信号だ。おい、全隊、土を崩して、地下戦車を急ぎ掘り出せ！」

珍らしい号令が出た。

待機していた小隊の全員は、鶴つるはし嘴とシャベルとをもって、戦車のそばに駆けつけた。

そして急いで土を崩して、地下戦車を救いにかかった。どうやら、地下戦車第一号は、失敗の巻まきらしい。

科学する心

せっかく骨を折って設計した地下戦車第一号が、ものの見事に、失敗の作となってしまったので、岡部一郎の落胆らくたんは、非常に大

きかった。

彼は、掘りだされた醜態しゅうたいの地下戦車の中から瓦斯ガスにふかれ
たまつくる顔を外へ出したとき、その両眼は、無念の涙で一ぱ
이었다。

彼は、戦車からはいだすと今にもぶつたおれそうな身体を、両
脚あしで支えて、加瀬谷少佐の前に出た。

「部隊長どの、自分は……」

とまではいったが、あとはのどにつかえて、声が出なくなつた。
彼は、歯をくいしばって、われとわが横面よこつらを、がーんとなぐり
つけた。そして、はつとしたところで、彼は、懸命の声をふりし
ぼって、

「……自分は、すまないことをいたしました。用意が足りんで、まことに、すまないであります」

岡部一郎は、それだけいうと、もうたまらなくなつて、思わず戦車服の袖で、^{そで}両眼をおさえた。ぽたぽたと、大粒の涙が、戦車帽の袖から、下に落ちて、土にしみこんだ。

加瀬谷少佐は、じつと岡部伍長のこの様子を見ていたが、そのとき、形を改め、^{あらた}

「岡部伍長、今日の地下戦車の試験は、ついに失敗におわつた、お前の設計は、まだ充分でない。そのことは、部隊長として、叱^{しか}り置く」

と、きめつけければ、岡部伍長は、涙にぬれた顔をあげ、^{げんぜん}厳然

と不動の姿勢をとって、

「はい」と、こたえた。

「だが、この失敗のためにお前に命じた地下戦車研究の志がもしすこしでも鈍るにぶようなことがあれば、わしはお前をさらに叱りつけねばならん」

加瀬谷少佐は、一段と声をはげましていった。

「はい」

「もし、ここでお前の志がくじけることあらば、わしは、お前の御奉公ごほうこうの精神をうたがう。つまり、お前は、自分一個の慾心よくしんで、これまで地下戦車の研究をつづけていたのだと思い、わしはお前あたらたを新に叱るぞ」

「は」

「地下戦車の研究は、お前一個の慾望を充たすために、命ぜられて
 いるものではない。おそれおおくも、皇軍の高度機械化を一日
 も速すみかに達成するため、特に地下戦車の設計製作の重じゅう責せきをお
 前にが担になっているのである。お前は、それを忘れてはならぬ。一日
 も速かに地下戦車が欲しいこの時局に、多大の物資を使つて、而しか
 もついに失敗したということは、もちろん感心できないことであ
 る。しかしながら、失敗を失敗として、そのまま終らせてはなら
 ぬ。失敗はすなわち、かがやかしい成功への一種の発はつ条じょうであ
 ると思ひ、このたびの失敗に奮起して、次回には、更さらにりつぱな
 地下戦車を作り出せ。そのときこそ、今日の不ふ面めん目ぼくがつぐなわ

れ、それと同時に、皇軍の機械化兵力が大きな飛躍をするのだ。泣いているときじゃない。失敗を発条として、つよくはねかえせ。どうだ、わしのいうことがわかるか」

加瀬谷少佐のことばには、無限の慈愛じあいが言外げんがいにあふれていた。「は、はい」

岡部伍長は、感激のあまり、腸はらわたが千切れそうであった。

感激は、岡部伍長一人のものではなかった。彼と一緒に、その地下戦車にのりこんでいた工藤上等兵も、伍長の横に直立したまま、唇をぶるぶるふるわせていた。部隊長かたわらの傍に並いる萱原准尉その他の隊員たちも、ひとしく尊とうとい感激のうちにおののいていた。

ああ歴史的なその大感激の場面よ。その場にいあわせた者は、

誰一人として、その日のことを永遠に忘れないであろう。

「……岡部伍長は、只今より、あらためて粉骨碎身ふんこつさいしん、生命に

かけて、皇軍のため、優秀なる地下戦車を作ることを誓います」

「よろしい。その意気だ。しかし、機械化兵器の設計にあたって、いたずらに気ばかり、はやってはいかん。機械化には、あくまで、冷静透徹れいせいとうてつ、用意周到、綿密にやらんけりやいかんぞ。新戦車

をもって敵に向ったときに、あつけなく敵のためにひっくりかえされるようじゃ、役に立たん。おもちゃをこしらえるのでない。

あくまで実戦に偉力いりよくを發揮するものを作り出すのだ」

「はい。わかりました」

「よろしい。では、本日の試験は、これで終了した。——おい、

岡部伍長と工藤上等兵は、大分疲労しておるようじやから、皆で、よくいたわってやれ」

加瀬谷少佐は、慈父じふのような温いことばをそこに残して、立ち去った。感激に、また涙を落としている二人の兵のまわりを、萱原准尉その他が取り巻いて、やさしく肩を叩いてやるのが見える。

改良型第二号

そのことあつてのち、岡部伍長は、また一段と、地下戦車の研

究に、ふるいたったようであった。

彼はまた、例の倉庫の中の研究室にこもつて、計算尺をうごかし、紙のうえに、鉛筆を走らせ、一分の時間もおしいという風に見えた。

第一号戦車の失敗以来、一緒に戦車にのりこんだ工藤上等兵が、あらたに彼の助手として、その部屋に机をならべることになった。これは、一つには当人の希望でもあったし、また一つには、加瀬谷部隊長のおもいやりもあつて、それが許されたのであった。

だが、岡部伍長は、別に工藤上等兵の手をかりるほどの用はなかつたのである。むしろ、工藤が邪魔になつて仕方がないくらいであつたが、それに反して、工藤はとても大悦およろこびであつた。

「伍長どの。こんどの設計は、すばらしいようですね。こいつはきつと、大成功ですよ」

工藤は、岡部の前へ来て、方眼紙にかいた設計図を、熱心にのぞきこむのであった。

「おい工藤。そう、お前の頭を前に出してくれるな。そして、しばらくだまっていてくれ」

「は。邪魔をして、わるかったでありますね」

「いや、邪魔というのではないが、お前がこえを出すと、とたんに、そこまで出かかったいい考えが、ひっこんでしまうのだ」

「そうでありますか。では、だまっております」

工藤は、ちよつときびしそうな顔になって、自分の机の上に、

本をひろげる。

そんなことがくりかえされているうちに、何時いつからはじまったか、岡部もよくおぼえていないが、工藤上等兵が、この部屋の入に、きまつてボール紙の函はこを携帯しているのに気がつくようになった。

「工藤。お前がいつも手に持っているその函には、何がはいつているのか。ばかに、大事にしているじゃないか。中には、菓子でもののばせてあるのではないか」

「ちがいますよ。伍長どの。自分は、御存知ごぞんじのように、酒はすきですが、甘いものは、きらいであります」

「じゃあ、中には何がはいつているのか」

「は、この中には、ソノ、ええと、自分の身のまわりの品がはいっているのです。あやしいものではありません」

「そうか。それならいいが……」

工藤は、ほっとしたような表情になった。

「伍長どの。邪魔だとは思いますが、どうぞ自分にも、こんど作る地下戦車のことを、話してください。自分は、気が気ではありません」

「ああそうか。また、この前のように失敗すると困るというのだらう」

「いや、そうではありません。あの失敗——いや、あの日以来、自分は、地下戦車というものに、たいへん興味をもつようになり

ました。このごろでは、夢に地下戦車のことを見ることも多くなつて、自分でもおどろいているのであります。で、どう改良されるのでありますか、こんどの地下戦車は——」

工藤は、いつの間によら、顔を、岡部伍長の机の上へ、ぬつとさしのばしていた。

岡部は、工藤の熱心な面持おももちを見ると、もう叱りつけることは出来なかつた。そこで彼は、出来かかつた設計図を、工藤の前へよせてやり、鉛筆でその上を軽く叩いて、

「まあ、やっと、ここまで出来たんだが、いや、こんどは深く考えさせられたよ。なにしろ、前回にこりているからね」

「前は、自分の身体が、地下戦車の——胴の中できくるくる転が

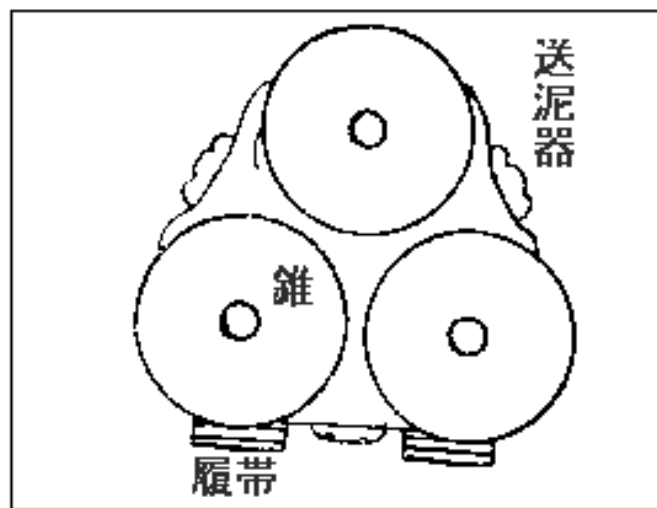
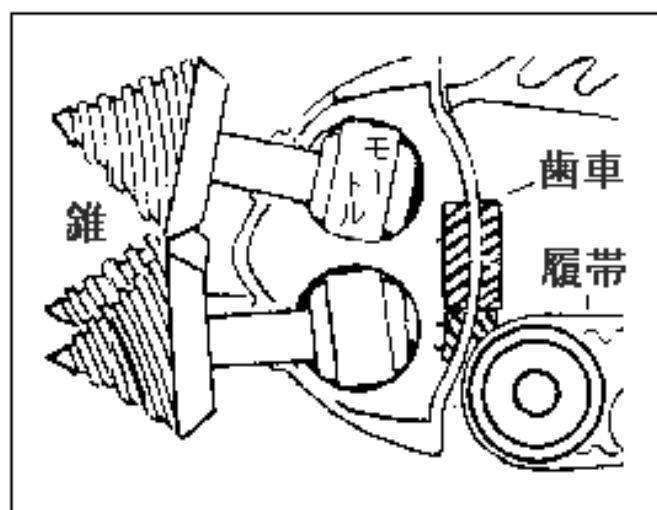
りだしたのには、おどろいたであります。まさか、戦車の胴が、ぐるぐる廻転をはじめたとは思わなかったものですか。こんどは、大丈夫ですか」

「ああ、そのことは、第一番に考えた。こんどはもう、大丈夫だ。胴は決して廻らない。そのために、こういう具合に、地下戦車の腹に、キャタビラ（履帯）をつけた」

そういつて岡部は、図のうえを、鉛筆で叩いた「第三図」。

「ああ、なるほど。おや、こんどの地下戦車は、^{きり}錐のところか、ずいぶんかわっておりますね」

「そうだ。この前の地下戦車は、直進する一方で、方向を曲げることができない。それでは困るから、こうして、^{かいてんきり}廻転錐を三つ



第三圖

に分けた」

「なるほど。この算盤玉そろばんだまのようなのが、新式の廻転錐でありますか。これが、どうなるのでしょうか」

「つまり、この三つの廻転錐は、それぞれ一種の電動機を持って直結されているんだ。そして、電動機を中心を中心点として、廻転錐は約九十度、どっちへも首をふることができるのだ。そして、いいところでぴったり電動機の台をとめる。そうすると、廻転錐の首は、もうぐらぐらししない。そして、この首は、多少、前へ伸びたり、また戦車の胴どうへ引込むようにもなっているんだ」

「なかなか考えられましたね」

と、工藤上等兵は、にこにこ顔だ。

神々ここに在^あり

あたらしい地下戦車の説明を、岡部はつづける。

「こうしておけば、三つの廻転錐の軸を平行にしておいて廻すと、地下戦車は前進するのに一等便利だ。しかしどっちかへ曲る必要のあるときは、三つの廻転錐の軸を外向きにひろげるのだ。すると大きな穴があく。大きな穴があけば、地下戦車は、ぐつと全体を曲げても、穴につかえない。まずこれで、十五度乃至^{ないし}三十度の

カーヴは切れるつもりだ」

「はあ、いいですなあ」

工藤は、かんしんのでいである。

「第三の改良点は、掘りとった土を、後へ送る仕掛だ。これはなかなかむずかしい問題なんだが、どうやらこれで、うまくいきそうに思う」

「ほう、それはどういう仕掛になっていますか」

「つまり、廻転錐でもって削けずられた土は、まず錐のうしろへ送られる。すると土は、地下戦車の胴にあたるが、戦車の胴の前方は、深い溝みぞのついた緩ゆるやかな廻転式のコンベヤーになっていて、土をあと後へ搬はこぶのだ。そして土は、戦車の側面に出るが、ここは、蛇の

腹のような別のコンベヤーになっていて、どしどし土を後方へ送る」

「なるほど。ここにありますか」

工藤上等兵は、せんざんこうという鱗うろこだらけの背中のような地下戦車の胴を指す。

「そうだ。地下戦車の胴は、後へいくほど細くなっているから、土は具合よく、後へ送られるのだ。それからもう一つ重要なことは、この戦車が腹の下のキャタピラで前進すると戦車の後方には隙が出来る。最初うまくやれば、このところは、真空になる。だからその隙間へ、前から送られてくる土を吸いこむ働きもする。まるで、真空掃除器のようなものだ。どうだ、わかったかね」

「はあ、大体わかったように思いますが、これは前回の地下戦車第一号とちがって、ずいぶん進歩したものですなあ。いや、これで自分の祈願きがんも、ききめがあらわれたというものであります」

工藤上等兵は、わがことのように喜び、

「で、この戦車第二号は、いつから試作にとりかかるのでありますか」

「さあ、この設計を、もう一度よくしらべ直した上で、加瀬谷部隊長殿へ報告しようと思つとる。あと半年はかかるだろうな」

「そんなにかかりますか。それは待ちどおしいですね」

「いや、試作うかが伺いのこともあるし、予算のこともあるし、工場や資材の関係もあって、おれの思うようにはいかないんだ。なにし

ろ、まだわが国は貧乏^{びんぼうこく}国で、資材は足りないし、製作機械もずいぶん足りないし、技術者の数も少ない。うんと整備しなければ、アメリカやソ連やドイツについていけない」

「なるほど。すると、まだまだ祈願^{きがん}をしなければ、日本はりっぱになりませんね」

「そのとおりだ。——そうだ、今日は、一度この設計図を部隊長殿にごらんに入れることにしよう。おい工藤。部隊長殿は御在^{ございし}室^{むろ}か、ちよつと見てきてくれ」

「はい」

工藤は、岡部の命令で、すぐさま部屋を出ていった。

岡部伍長は、やっと設計を終ったので、さすがにほつとして、

机ほおづえに頬杖をついた。すると、どこからともなく、ぷーんと、いい匂いが鼻をうった。

「おや、へんだなあ。このいい匂いは、酒だ！ どこに酒があるのかしらん」

伍長は立ちあがって、あたりを見まわした。どうも、よくわからない。彼は、鼻をくすくすいわせながら、机のまわりを歩きまわっていたが、そのうちに気がついたのは、工藤上等兵の机き上じょうのついていたボール紙はこの函であった。

「あつ、これだ！」

函をとりあげて、蓋のところを鼻につけてみると、ぷーんとつよい酒の匂いがする。

「けしからん、工藤のやつ、いくら酒好きにしろ、こんなところに酒をかくしておくなんて……」

岡部伍長は、顔を硬くして、工藤上等兵の大事にしている函の蓋を開いてみた。

「おや、これは何だ」

函の中には、意外にも、たくさんの神社のお護り札まもふだが、所もせまく張りつけられてあった。そのお札には、〃四月三日祈願〃という具合に、一つ一つ日附が書いてあった。また函の一番奥には、工藤の筆跡ひっせきで、〃岡部伍長殿の地下戦車完成大祈願だいきがん。その日までは、絶対禁酒のこと〃と記してあった。そして函の中には、小さい葉びんが一つ転ころがっていて、栓せんの間から、酒がにじんで、ぷ

ーんといいかおりを放っていた。

ここにおいて、岡部伍長は一切をさとつた。工藤は、彼のため外出のたびに神社廻りをして祈願をなし、好きな酒も絶^たつて、一生けんめいに地下戦車が完成するように願をかけていたのであつた。工藤が、常にこの函を大事にして、いつも身のまわりから放棄なかつたわけも、これでわかつた。

「おお工藤。ありがとう。おれは、きっと完成してみせるぞ。ああ、ありがとう」

岡部伍長は、思わずお札^{ふだ}の入った函を、頭の上におしいたごた。

大団円

あらたに設計された地下戦車第二号は、それから一ヶ月のちに、実物が出来上った。

これから半年もかからなければ出来まいと思われたのに、僅か一ヶ月で出来上ったのには、或るわけがあつた。

そのわけというのは、外ほかでもない、国際情勢が急に悪化あつかしたからである。かねて〇〇国境方面に、世界最大を誇る大機械化兵団を集中中であつた〇〇軍は最近にいたりついにわが皇軍陣地こうぐんじんちに

対して、露骨ろこつなる挑戦をはじめるに至り、しかも〇〇鉄道は、その方面へ、ぞくぞくと大兵力を送っていることが判明した。そこでいよいよここに、〇〇国境を新戦場として、互たがに誇ほこりあう彼我ひがの精銳機械化兵団が、大勝たいしょうか全滅ぜんめつかの、乾坤けんこん一擲てきの一大決戦を交えることになったのである。そこで、機械化部隊を、さらに高度に強化する必要にせまられ、地下戦車の試作も急にいそがれることになったのであった。

試作が出来上った岡部式の地下戦車第二号は、前回と同じく、ぼうけんか某県下の演習場へ引出された。

あかつき暁を待つて、覆布おおひがとりのぞかされると、その下から、地下戦車はすこぶる怪異かいいな姿をあらわした。

「ほう、前回の地下戦車とは、まるで形がちがってしまつたな」と、感歎かんたんの声を放つ見学の将校もいた。

こんどの地下戦車は前のものよりも、すこし重量を増して、四十トンちかくなつたが、これは主として原動機を三個に分けたためであつた。

岡部伍長と工藤上等兵のほかにも、もう二名の兵があらたに、この中にのりこんだ。

加瀬谷少佐は、この日、ことの外ほかにこにこしていた。こんどこそ、この地下戦車はうまくうごくであろうと見極みきわめていたからだった。

「地下戦車第二号、出発します」

岡部伍長は車上から上半身を出して、加瀬谷部隊長の方へ報告した。少佐は、手をあげた、伍長は拳手の礼をして、旗をふると、姿を車内に消した。外蓋そとふたが、ぱたんと閉じられた。つづいてごうごうとエンジンが、まわりだした。まもなく地下戦車は、そろそろと動きだした。そして、前方二十メートルのところにある丘の腹に向っていった。

「この前のときは、地下戦車が自力で動かないものだから、牽けんい引車んしゃで後から押したもんだ。こんどはちゃんと自分で走るからわしは安心したよ」

少佐は、かたわら傍の将校の方をむいて、眼を細くして笑った。

そのうちに、地下戦車は、三本の角つのみみたいな廻かいてんきり転錐を、ぷす

りと赤土^{あかつち}の丘の腹につきたてた。

ぷりぷり、ぎりぎりぎり。赤土が、霧^{きり}のようになつて、後方へとぶ。エンジンの音が一段と高くなる。

「ほう、こんどは、岡部のやつ、なかなか鮮^{あざや}かにやつてのけるぞ。ほう、どんどん深く入つていくわ」

部隊長をはじめ、見学の将校団は、思わず前へ出ていった。地下戦車は、まるで雪を削^{けず}るロータリー車のように、すこぶる楽々と、赤土の中へもぐつていった。そして、まもなく戦車の尾部^{びぶ}が土中にかくれ、あとは崩^{くず}れ穴^{あな}だけになつたが、その穴からは、もくもくと赤土が送り出されてきた。それもほんのしばらくで、やがて地下戦車の入つたあとは妙な崩^{くず}れ跡^{あと}をのこしたきりで、戦車

が今どんな活動をしているのか、さっぱり状況がわからなくなつた。

ただどこやらから、地下戦車のエンジンの響きが聞えるのと、立っている人々の足に、じんじんと、異様な地響いようじひびきが伝わるのと、たったそれだけであつた。

「どうしたのでしょうか」

「さあ、丘の向うから顔を出すのじやないかなあ。まっすぐ進めば、そうなる筈だが……」

将校たちの中には、丘をのぼって向う側を見ようと移動する者もあつた。しかし地下戦車はなかなか顔を出さなかつたので、待ちかねて、加瀬谷部隊長がにこついている、また元の場所に戻つ

てきた。

「加瀬谷少佐、地下戦車は、行方不明になってしまったじゃないか。またこの前のように、土中でえんこして救助を求めているのじゃないか」

「いや、大丈夫でしょう。あと三十分ぐらいたつと、予定どおり、きつと諸君をおどろかすだろう」

「三十分？　そうかね」

それから三十分ばかりすると、一度消えて見えなくなった地下戦車のエンジンの音が、また聞えだした。

「おや、こつちの方角だぞ」

一行は、後をふりかえった。するとおどろくべし、後方百メー

トルのところの草原くさはらが、むくむくともちあがると見るまに、その下から盛んに土をとばしながら地下戦車の大きな背中が、ぬつとあらわれたのには、一同はおどろき且かつよろこんで、思わず声をそろえて、万歳ばんざいを叫んだのであった。

ああ、ついに実用になる地下戦車が完成したのだ。これこそ、わが機械化部隊の歴史的瞬間であつた！

すっかり巨体きよたいをあらわした地下戦車の中から、岡部伍長がまっ赤じようきに上気した顔をあらわした。彼は報告のため、加瀬谷少佐の前に駈かけつけ、ぴつたりと拳手きよしゆの礼をし、

「岡部伍長外三名、地下戦車第二号を操縦して、地下七百メートルを踏破とうは、只今きちやく帰着しました。戦車及び人員、異状なし、おわ

り」

「おお、よくやった。おれは満足じゃ」

と、少佐は、つと前にすすんで、岡部伍長の手をつよく握った。「おい岡部、お前も満足じやろう。とうとう地下戦車長として成功を収めたんだからなあ」

「いや、まだ成功はして居おりません」

「なに、成功をしとらんというのか」

「はい。操縦してみまして、まだまだ気に入らないところを沢山発見しました。自分は、さらに改良の第三号を作りたいと思いません。それが完成すれば、どうやらこうやら、皇軍機械化部隊の役に立つことと思います」

岡部一郎は、この輝かしい成功の誉ほまれをしりぞけて、どこまでも謙遜けんそんしたのは、床ゆかしきかぎりであつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第Ⅰ巻 地球要塞」三二書房

1990（平成2）年4月30日第1版第1刷発行

※図版は、初収単行本の「未来の地下戦車長」山海堂出版部、1941（昭和16）年10月1日発行からとり、文字のみ新字にあらためました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：kazuish

2006年10月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

未来の地下戦車長

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>